特217
665

# 小泉八雲鈔

始

特 217
665

# 小泉八雲鈔

上伊那郡教育會編

# 目次


猫を畫いた子供……一
耳無芳一の話……一二
約束……三五
停車場にて……四五
果心居士……五三
おばあさんの話……七一
濱口五兵衛……八三
或る女の日記……九九
文學に關する讀書について……一四九

# 猫を畫いた子供

昔々、日本の小さい田舎村に、一人の貧乏な百姓と其の女房が住んでゐました、夫婦共極く良い人達でした。二人の間には子供が大勢あつて、それを皆育てて行くのは随分骨の折れる事でした。年上の息子は中々丈夫な子で僅か十四の時立派にお父さんの手助が出來ました、それから小さい女の子達はやつと歩けるやうになるが早いかもうお母さんに手傳する事を覺えたのです。

所が一番の年下の子供は、小さい男の子でしたが、どうも力仕事が適ひさうには思はれませんでした。大層賢い子で——兄さん達や姉さ

ん達誰よりも賢かつたのですが、至つて身體が弱くて小さかつたので、大して大きな男には迚もなれまいと言ふ評判でした。そこで兩親は、百姓になるより坊主になつた方があの子の爲に良いだらうと考へたのです。或る日兩親は其の子を村の寺に連れて行つて、其處に住んでゐる親切な年取つた和尚に、もしお願が出來たら此の小伜をお弟子として置いて下さるやうに、そして坊さんの心得をすつかり教へてやつて下さるやうに、と頼みました。

年寄は此の小童にやさしく言葉を掛けて、それから二つ三つむづかしい事を訊き質しました。其の答が中々巧者だつたものですから和尚は小さい小僧を弟子として寺に引取り、坊さんになるやうに教へ込んでやるといふ事を承知したのです。

子供は老和尚の言ふ事は直ぐに覚えましたし、大概の事はよく言付





を守りました。けれども一つ悪い事がありました。勉強の時間中に好んで猫の畫を畫くのです、それに猫なぞ決して畫いてはならない所にまで好んで猫を畫くのです。

どんな時であらうと自分獨りぎりになつたが最後、猫を畫きます。お經の本の緣にも畫くし　寺の屛風衝立殘らずに畫く、さては壁といはず柱といはず幾つも幾つも猫を畫くのです。和尚は何遍となく良くない事だと言ひ聞かせましたが、どうしても畫くのを止めません。彼が猫を畫くのは本當のところ畫かずにはゐられないからでした。彼は『畫工（えかき）の天才』と言はれるものを持つてゐたので、全く其の爲に寺の小坊主にはあまり向かなかつたのです、——良い小坊主といふものはお經本を習はなければならないものですから。

或る日彼が唐紙の上にまことに上手な畫を畫いて仕舞つた後で、老

和尚は厳しく言渡しました。『小僧よ、お前は直ぐに此の寺を出て行かねばならぬぞ。お前は決して良い和尚になるまいが大方立派な畫工にはなる事ぢやらう。さて俺は最後に一言忠告をして進ぜる、堅く心に留めて忘るまいぞ。夜は廣き所を避けよ、狹きに留まれ』

其の子供は和尚が『廣き所を避けよ、——狹きに留まれ』と言つたのはどういふ意味だか解りませんでした。彼は自分の着物を入れた小さい包を、出て行く爲に括りながら、考へて考へ抜いたのですが、さう言つた言葉に合點が行きませんでした、けれども和尚にもうかれこれ口を利くのは恐はいので、只左様ならとだけ言つたのです。

子供はしみじみ悲しく思ひながら寺を後にしましたが、さて自分はどうしたらいいのかと迷ひ始めました。もし其の儘家に歸れば察する所お父さんは和尚さんの言ふ事を聞かなかつたからと言つて自分を叱





るにきまつてゐる、だから家に行くのは恐はいと思つたのです。其の時不圖思ひ出したのは、十二哩離れた隣村に、大層大きな寺があるといふ事でした。其の寺には大勢坊さんがゐると前から聞いてゐたので す、そこで其の坊さん達の所へ行つてお弟子入りを頼まうと彼は心を決めたのでした。

さて其の大きな寺はもう閉め切つてあつたのですが、子供は其の事を知らなかつたのです。寺が閉された譯は、化物が坊さん達をおどかして追出して仕舞ひ、自分が其處に住み込んで仕舞つたからです。幾人か氣の強い侍達が其の後化物を退治に夜其の寺に出かけた事もありました、けれども其の人達の生きた姿は二度と見られませんでした。さういふ事を誰も其の子供に話した者は無かつたのです。——そこで彼は村を指して遠い路を歩いて行きました、坊さん達にやさしく扱は

れればいいがと思ひながら。

村に着いた頃はもう暗くなつて、人は皆寝てゐましたが、目貫の通を外れた場末の丘にある大きな寺が彼の眼に止りました、それに寺の中に一つ明りが點いてゐるのも見たのです。かういふ話をする人達の言ふ事ですが、化物はよく明りをとぼして、頼り少い旅人共が泊りに來るやうに誘き寄せるのださうです。子供は直ぐに寺に行つて、戸を叩きました。中には何の音もしません。それから何遍もトントン叩きましたが、矢張誰も出て來ないのです。しまひにそーつと戸を押して見ました、すると其處は締つてはゐない事が解つたので彼は大喜びしました。そこで中に入つて行きました、見ると明りがとぼつてゐるのです、――でも坊さんは居りません。

彼は坊さんが直ぐ今にもやつて來るだらうと思つて、坐つて待つて



ゐました。其の時氣を付けて見るとどこもかしこも寺の中は埃で薄黒くなつてゐて、而も蜘蛛網が一杯懸つてゐました。そこで彼はかう考へました、坊さん達は部屋を綺麗にして置かうと思つて、きつと喜んで小坊主の一人は置くに違ひないと。何故坊さん達が何でもかでも埃だらけの儘にして置くのか彼には不思議に思へました。けれども、何より氣に入つたのは、猫を畫くのに手頃の白い大屏風が幾つかあつた事です。疲れてはゐたのですが、彼は早速硯箱を探して、一つ見つけ出し、墨を磨つて、猫を畫き始めました。

彼は屏風の上にそれはそれは隨分澤山の猫を畫きました、畫いて仕舞ふと眠くて眠くてたまらなくなつて來ました。眠らうと思つて屏風の傍に横になりかけた丁度其の時です、不圖彼は『廣き所を避けよ。――狹きに留まれ』といふあの言葉を思ひ出しました。

寺は大變廣かつたのです。彼は全く獨りぼつちです、それで今此の言葉を思ひ出した時――言葉の意味はよく解らなかつたけれど――始めて少し恐はくなつて來たのです。そこで『狹い所』を探して眠らうといふ事に決めました。彼は滑戸の附いてゐる小さい部屋を見つけ其處へ行つて、自分を閉め込んで仕舞つたのです。それから横になつてグツスリ寢込みました。

夜も大分更けた頃大變な凄じい音――闘つたり叫んだりする音――がして彼の眼を覺しました。其の音は隨分激しかつたので彼は小部屋の隙間から覗く事さへ恐はかつたのです。恐しさに息を殺したまま一つと寢てゐました。

寺に點いてゐた明りは消えました、けれども物凄い音は續いて、而も段々物凄くなつて、寺中が搖れたのです。長い事經つてからひつそりしました、けれども子供は未だ動くのが恐はかつたのです。彼は朝日の光が小さい戸の隙間から射し込んで來るまで身動きしませんでした。

それから彼は隱れてゐた所からそーつと抜け出して、あたりを見廻しました。眞先に眼に付いたのは寺の床がどこもかしこも血で一杯になつてゐる事でした。次に彼の見たのは、其の眞中に死んで横たはつてゐる、途方もなく大きな、恐しい鼠――牛よりも大きな、化け鼠だつたのです。

然し何人(だれ)が、それとも何物がそれを退治する事が出來たのでせう。其處には人も居らねば他の動物もゐませんでした。不圖子供は眼を留めました、自分が前の晩に畫いた猫といふ猫は皆其の口が血で赤く濡れてゐるのです。さては自分の畫いた猫共が此の化物を殺したのだな

と彼は其の時悟りました。又、あの智恵のある老和尚が何故自分に、『夜は廣き所を避けよ、――狹きに留まれ』と言つて聞かせたかといふ事も、其の時始めて解つたのです。

其の後其の子供は大層名高い畫工（ゑかき）になりました。日本に來る旅人達は今でも彼の畫いた猫がいくつか見られます。





# 耳無芳一の話

七百年以上も昔の事、下ノ關海峽の壇ノ浦で、平家卽ち平族と、源氏卽ち源族との間の、永い爭の最後の戰鬪が戰はれた。此の壇ノ浦で平家は、其の一族の婦人子供幷びに其の幼帝――今日安德天皇として記憶されてゐる――と共に、全く滅亡した。さうして其の海と濱邊とは七百年間その怨靈に祟られて居た……他の個處で私は其處に居る平家蟹といふ不思議な蟹の事を讀者諸君に語つた事があるが、それは其の背中が人間の顏になつて居り、平家の武者の魂であると云はれて居るのである。しかし其の海岸一帶には、澤山不思議な事が見聞される。

闇夜には幾千となき幽靈火が、水うち際にふはふはさすらふか、若しくは波の上にちらちら飛ぶ——卽ち漁夫の呼んで鬼火卽ち魔の火と稱する青白い光である。そして風の立つ時には大きな叫び聲が、戰の叫喚のやうに、海から聞えて來る。

平家の人達は以前は今よりも遙かに焦慮いて居た。夜、漕ぎ行く船のほとりに立顯はれ、それを沈めようとし、又水泳する人をたえず待受けて居ては、それを引ずり込まうとするのである。これ等の死者を慰めるために建立されたのが、卽ち赤間ヶ關の佛教の御寺なる阿彌陀寺であつたが、其の墓地も亦、それに接して海岸に設けられた。そして其の墓地の內には入水された皇帝と、其の歷歷の臣下との名を刻みつけた幾箇かの石碑が立てられ、且つそれ等の人々の靈のために、佛教の法會が其處で整然と行はれて居たのである。この寺が建立され、





その墓が出來てから以後、平家の人達は以前よりも禍ひをする事が少くなつた。しかしそれでもなほ引續いて折折、怪しい事をするのではあつた——彼等が完き平和を得て居なかつた證據として。

幾百年か以前の事、この赤間ヶ關に芳一といふ盲人が住んで居たが、この男は吟誦して、琵琶を奏するに妙を得て居るので世に聞えて居た。子供の時から吟誦し、且つ彈奏する訓練を受けて居たのであるが、まだ少年の頃から、師匠達を凌駕して居た。本職の琵琶法師としてこの男はおもに、平家及び源氏の物語を吟誦するので有名になつた、そして壇ノ浦の戰の歌を謠ふと鬼神すらも淚をとどめ得なかつたといふ事である。

芳一はその出世の首途の際、甚だ貧しかつたが、しかし助けてくれる親切な友があつた。即ち阿彌陀寺の住職といふのが、詩歌や音樂が好きであつたので、度々芳一を寺へ招じて彈奏させ又、吟誦さしたのであつた。後になり住職は此の少年の驚くべき技倆に酷く感心して、芳一に寺をば自分の家とするやうにと云出したのであるが、芳一は感謝して此の申し出を受納した。それで芳一は寺院の一室を與へられ、食事と宿泊とに對する返禮として、別に用のない晩には、琵琶を奏して、住職を悦ばすといふ事だけが注文されて居た。

或る夏の夜の事、住職は死んだ檀家の家で、佛教の法會を營むやうに呼ばれたので、芳一だけを寺に殘して納所を連れて出て行つた。それは暑い晩であつたので、盲人芳一は涼まうと思つて、寢間の前の縁側に出て居た。この縁側は阿彌陀寺の裏手の小さな庭を見下して居るのであつた。芳一は住職の歸來を待ち、琵琶を練習しながら自分の孤獨を慰めて居た。夜半も過ぎたが、住職は歸つて來なかつた。しかし空氣はまだ中中暑くて、戸の内ではくつろぐわけには行かない、それで芳一は外に居た。やがて、裏門から近よつて來る跫音が聞えた。誰かが庭を横斷して、縁側の處へ進みより、芳一のすぐ前に立止つたが、それは住職ではなかつた。底力のある聲が盲人の名を呼んだ出し抜けに、無作法に、丁度、侍が下下を呼びつけるやうな風に

『芳一！』

芳一はあまりに吃驚して暫くは返事も出なかつた。すると、その聲は嚴しい命令を下すやうな調子で呼ばはつた——

『芳一！』

『はい！』と威嚇する聲に縮み上つて盲人は返事をした——『私は盲目で御座います！——何誰がお呼びになるのか解りません！』

見知らぬ人は言葉をやはらげて言出した、『何も恐はがる事はない、拙者はこの寺の近處に居るもので、お前の許へ用を傳へるやうに言ひつかつて來たものだ。拙者の今の殿樣と云ふのは、大した高い身分の方で、今、澤山立派な供をつれてこの赤間ケ關に御滯在なされて居るが、壇ノ浦の戰場を御覽になりたいといふので、今日、其處を御見物になつたのだ。處で、お前がその戰爭の話を語るのが、上手だといふ事をお聞きになり、お前のその演奏をお聞きになりたいとの御所望である、であるから、琵琶をもち卽刻拙者と一緒に尊い方方の待受けて居られる家へ來るが宜い』





當時、侍の命令と云へば容易に、反くわけには行かなかつた。で、芳一は草履をはき琵琶をもち、知らぬ人と一緒に出て行つたけれども、芳一は餘程急ぎ足で歩かなければならなかつた。また手引をしたその手は鐵のやうであつた。武者の足どりのカタカタいふ音はやがて、其の人が悉皆甲冑を著けて居る事を示した——定めし何か殿居の衛士でもあらうか、芳一の最初の驚は去つて、今や自分の幸運を考へ始めた——何故かといふに、此の家來の人の「大した高い身分の人」といつた事を思ひ出した。自分の吟誦を聞きたいと所望された殿樣は、第一流の大名に外ならぬと考へたからである。やがて侍は立止つた。芳一は大きな門口に達したのだと覺つた——處で、自分は町のその邊には、阿彌陀寺の大門を外にしては、別に大きな門があつたとは思はなかつたので不思議に思つ

た。『開門！』と侍は呼ばはつた——すると門を拔く音がして、二人は這入つて行つた。二人は廣い庭を過ぎ再び或る入口の前で止つた。其處で此の武士は大きな聲で『これ誰か內のもの！芳一を連れて來た』と叫んだ。すると急いで歩く跫音、襖のあく音、雨戸の開く音、女達の話し聲などが聞えて來た。女達の言葉から察して、芳一はそれが高貴な家の召使である事を知つた。しかしどういふ處へ自分は連れられて來たのか見當が付かなかつた。が、それを兎や角考へて居る間もなかつた。手を引かれて幾箇かの石段を登ると、其の一番最後の段の上で、草履をぬげと云はれ、それから女の手に導かれ、拭込んだ板敷のはてしのない區域を過ぎ、覺え切れないほど澤山な柱の角を廻り、驚くべき程廣い疊を敷いた床を通り

大きな部屋の眞中に案內された。

其處に大勢の人が集つて居たと芳一は思つた。絹のすれる音は森の木





の葉の音のやうであつた。それから又何だかガヤガヤ云つて居る大勢の聲も聞えた——低音で話して居る。そしてその言葉は宮中の言葉であつた。

芳一は氣樂にして居るやうにと云はれ、座蒲團が自分のために備へられて居るのを知つた。それでその上に座を取つて、琵琶の調子を合はせると、女の聲が——その女を芳一は老女卽ち女のする用向を取締る女中頭と判じた——芳一に向かつてかう言ひかけた——

『只今、琵琶に合はせて、平家の物語を語つて戴きたいといふ御所望に御座います』

さてそれを悉皆語るには幾晩もかかる、それ故芳一は進んでかう訊ねた——

『物語の全部は、一寸は語られませぬが、何の條下を語れといふ殿

様の御所望で御座いますか？』

女の聲は答へた――

『壇ノ浦の戰の話をお語りなされ――その一條下が一番哀れの深い處で御座いますから』

芳一は聲を張上げ、烈しい海戰の歌をうたつた――琵琶を以て、或は櫂を引き、船を進める音を出したり、はツしと飛ぶ矢の音、人々の叫ぶ聲、足踏みの音、兜にあたる刄の響、海に陷る打たれたもの音等を、驚くばかりに出したりして。その演奏の途切れ途切れに、芳一は自分の左右に、賞讃の囁く聲を聞いた、――「何といふ巧い琵琶師だらう！」――「自分達の田舍ではこんな琵琶を聽いた事がない！」――「國中に芳一のやうな謠ひ手はまたとあるまい！」すると一層勇氣が出て來て、芳一は益々うまく彈き且つ謠つた。そして驚のため周圍は森





としてしまつた。しかし終りに美人薄命の運命――婦人と子供との哀れな最後――雙腕に幼帝を抱き奉つた二位の尼の入水を語つた時には――聽者は悉く皆一樣に、長い長い戰慄へる苦悶の聲をあげ、それから後といふもの一同は聲をあげ、取亂して哭き悲しんだので、芳一は自分の起さした悲痛の強烈なのに驚かされた位であつた。暫くの間はむせび悲しむ聲が續いた。しかし、徐ろに哀哭の聲は消えて、又それに續いた非常な靜かさの內に、芳一は老女であると考へた女の聲を聞いた。

その女はかう云つた――

『私共は貴方が琵琶の名人であつて、又謠ふ方でも肩を竝べるもののない事は聞き及んで居た事では御座いますが、貴方が今晩御聽かせ下すつたやうなあんなお腕前をお有ちにならうとは思ひも致しません

でした。殿様には大層御氣に召し、貴方に十分な御禮を下さる御考である由を御傳へ申すやうにとの事に御座います。が、これから後六日の間毎晩一度づつ殿様の御前で演奏をお聞きに入れるやうとの御意に御座います――その上で殿様には多分御歸りの旅に上られる事と存じます。それ故明晩も同じ時刻に、此處へ御出向きなされませ。今夜、貴方を御案内いたしたあの家來が、また、御迎へに參るで御座いませう……それからも一つ貴方に御傳へするやうに申しつけられた事が御座います。それは殿様がこの赤間ケ關に御滯在中、貴方がこの御殿に御上りになる事を誰にも御話にならぬやうとの御所望に御座います。殿様には御忍びの御旅行ゆゑ、斯様な事は一切口外致さぬやうとの御上意によりますので。……只今、御自由に御坊に御歸り遊ばせ』





芳一は感謝の意を十分に述べると、女に手を取られてこの家の入口まで來、其處には前に自分を案内してくれた同じ家來が待つて居て、家につれられて行つた。家來は寺の裏の緣側の處まで芳一を連れて來て、其處で別れを告げて行つた。

芳一の戻つたのはやがて夜明けであつたが、その寺をあけた事には、誰も氣がつかなかつた――住職は餘程遲く歸つて來たので、芳一は寢て居るものと思つたのであつた。晝の中芳一は少し休息する事が出來た。そして其の不思議な事件に就いては一言もしなかつた。翌日の夜中に侍が又芳一を迎へに來て、かの高貴の集りに連れて行つたが、其處で芳一はまた吟誦し、前回の演奏が贏ち得た其の同じ成功を博した。

然るにこの二度目の伺候中、芳一の寺をあけて居る事が偶然に見つけられた。それで朝戻つてから芳一は住職の前に呼びつけられた。住職は言葉やはらかに叱るやうな調子でかう言つた、

『芳一、私共はお前の身の上を大變心配して居たのだ。目が見えないのに、一人で、あんなに遅く出かけては險難だ。何故、私共にことわらずに行つたのだ。さうすれば下男に供をさしたものに、それから又何處へ行つて居たのかな』

芳一は言逆れるやうに返事をした——

『和尚樣、御免下さいまし！少々私用が御座いまして、他の時刻にその事を處置する事が出來ませんでしたので』

住職は芳一が默つて居るので、心配したといふよりも寧ろ驚いた。それが不自然な事であり、何かよくない事でもあるのではなからうかと感じたのであつた。住職は此の盲人の少年が或は惡魔につかれたか、或は騙されたのであらうと心配した。で、それ以上何も訊ねなかつたが、密かに寺の下男に旨をふくめて、芳一の行動に氣をつけて居り、暗くなつてから、また寺を出て行くやうな事があつたなら、その後を跟けるやうにと云ひつけた。

すぐその翌晩、芳一の寺を脫け出て行くのを見たので、下男達は直ちに提燈をともし、その後を跟けた。然るにそれが雨の晩で非常に暗かつた爲、寺男が道路へ出ない内に、芳一の姿は消失せてしまつた。正しく芳一は非常に早足で歩いたのだ——その盲目な事を考へて見るとそれは不思議な事だ、何故かと云ふに道は惡かつたのであるから。男達は急いで町を通つて行き、芳一がいつも行きつけて居る家へ行き、訊ねて見たが、誰も芳一の事を知つて居るものはなかつた。しまひに、

男達は濱邊の方から寺へ歸つて來ると、阿彌陀寺の墓地の中に、盛んに琵琶の彈じられて居る音が聞えるので、一同は吃驚りした。二つ三つの鬼火　暗い晩に通例其處にちらちら見えるやうな――の外、そちらの方は眞暗であつた。しかし、男達はすぐに墓地へと急いで行つた、そして提燈の明りで、一同は其處に芳一を見つけた――雨の中に、安德天皇の記念の墓の前に獨り坐つて、琵琶をならし、壇ノ浦の合戰の曲を高く誦して。その背後と周圍と、それから到る處澤山の墓の上に死者の靈火が蠟燭のやうに燃えて居た。未だ嘗て人の目にこれほどの鬼火が見えた事はなかつた……

『芳一さん！――芳一さん！』下男達は聲をかけた『貴方は何かに魅されて居るのだ！……芳一さん！』

しかし盲人には聞えないらしい。力を籠めて芳一は琵琶を錚錚嘎嘎





と鳴らして居た――益々烈しく壇ノ浦の合戰の曲を誦した。男達は芳一をつかまへ――耳に口をつけて聲をかけた――

『芳一さん！――芳一さん！――すぐ私達と一緒に家にお歸んなさい！』

叱るやうに芳一は男達に向かつて云つた――

『この高貴の方方の前で、そんな風に私の邪魔をするとは容赦はならんぞ』

事柄の無氣味なに拘らず、これには下男達も笑はずには居られなかつた。芳一が何かに魅されて居たのは確かなので、一同は芳一を捕へその身體をもち上げて起たせ、力まかせに急いで寺へつれ歸つた――其處で住職の命令で、芳一は濡れた著物を脫ぎ、新しい著物を著せられ、食べものや、飲みものを與へられた。其の上で住職は芳一のこの

驚くべき行爲を是非十分に說き明かす事を迫つた。

芳一は長い間それを語るに躊躇して居た。しかし、遂に自分の行爲が實際、親切な住職を驚かし且つ怒らした事を知つて、自分の緘默を破らうと決心し、最初、侍の來た時以來、あつた事を一切語つた。

すると住職は云つた……

『可哀さうな男だ。芳一、お前の身は今大變に危いぞ！もつと前にお前がこの事を悉皆私に話さなかつたのは如何にも不幸な事であつた！　お前の音樂の妙技がまつたく不思議な難儀にお前を引込んだのだ。お前は決して人の家を訪れて居るのではなくて、墓地の中に平家の墓の間で、夜を過して居たのだといふ事に、今はもう心付かなくてはいけない　今夜、下男達はお前の雨の中に坐つて居るのを見たが、それは安德天皇の記念の墓の前であつた。お前が想像して居た事はみ





な幻影だ――死んだ人の訪れて來た事の外は。で、一度死んだ人の云ふ事を聽いた上は、身をその爲るがままに任したといふものだ。若しこれまであつた事の上に、またも、その云ふ事を聽いたなら、お前は其の人達に八つ裂きにされる事だらう。しかし、何れにしても早晩、お前は殺される……處で、今夜私はお前と一緒に居るわけには行かぬ。私は又一つ法會をするやうに呼ばれて居る。が、行く前にお前の身體を護るために、その身體に經文を書いて行かなければなるまい』

日沒前住職と納所とで芳一を裸にし、筆を以て二人して芳一の、胸、背、頭、顏、頸、手足――身體中何處と云はず、足の裏にさへも――般若心經といふお經の文句を書きつけた。それが濟むと、住職は芳一にかう言ひつけた。

『今夜、私が出て行つたらすぐに、お前は縁側に坐つて、待つて居なさい。すると迎へが來る。が、どんな事があつても、返事をしたり、動いてはならぬ。口を利かず靜かに坐つて居なさい——禪定に入つて居るやうにして。若し動いたり、少しでも聲を立てたりすると、お前は切りさいなまれてしまふ。恐はがらず、助を呼んだりしようと思つてはいかぬ。——助を呼んだ處で助かるわけのものではないから。私が云ふ通りに間違なくして居れば、危險は通り過ぎて、もう恐はい事はなくなる』

日が暮れてから、住職と納所とは出て行つた、芳一は言ひつけられた通り縁側に坐を占めた。自分の傍の板敷の上に琵琶を置き、入禪の姿勢をとり、じつと靜かにして居た——注意して咳もせかず、聞える





やうには息もせずに。幾時間もかうして待つて居た。

すると道路の方から跫音のやつて來るのが聞えた。跫音は門を通り過ぎ、庭を横斷り、縁側に近寄つて止つた——すぐ芳一の正面に。

『芳一！』と底力のある聲が呼んだ。が盲人は息を凝らして、動かずに坐つて居た。

『芳一！』と再び恐しい聲が呼ばはつた。ついで三度——兇猛な聲で——

『芳一』

芳一は石のやうに靜かにして居た——すると苦情を云ふやうな聲で

『返事がない！——これはいかん！……奴、何處に居るのか見てやらなければやア』……

縁側に上る重くるしい跫音がした。足はしづしづと近寄つて——芳一の傍に止つた。それから暫くの間——その間、芳一は全身が胸の鼓動するに連れて震へるのを感じた——全く森閑としてしまつた。

遂に自分のすぐ傍であらあらしい聲がかう云ひ出した——『此處に琵琶がある、だが、琵琶師と云つては——只その耳が二つあるばかりだ！……道理で返事をしない筈だ、返事をする口がないのだ——兩耳の外、琵琶師の身體は何も殘つて居ない……よし殿樣へこの耳を持つて行かう——出來る限り殿樣の仰せられた通りにした證據に……』

その瞬時に芳一は鐵のやうな指で兩耳を摑まれ、引きちぎられたのを感じた！　痛さは非常であつたが、それでも聲はあげなかつた。重くるしい足踏みは縁側を通つて退いて行き——庭に下り——道路の方へ通つて行き——消えてしまつた。芳一は頭の兩側から濃い溫いものの滴つて來るのを感じた。が、敢て兩手を上げる事もしなかつた……

日の出前に住職は歸つて來た。急いですぐに裏の縁側の處へ行くと何だかねばねばしたものを踏みつけて滑り、そして慄然として聲をあげた——それは提燈の光で、そのねばねばしたものの血であつた事を見たからである。しかし、芳一は入禪の姿勢で其處に坐つて居るのを住職は認めた　傷からはなほ血をだらだら流して。

『可哀さうに芳一！』と驚いた住職は聲を立てた——『これはどうしたことか……お前、怪我をしたのか』……

住職の聲を聞いて盲人は安心した。芳一は急に泣出した。そして、涙ながらにその夜の事件を物語つた。『可哀さうに、可哀さうに芳一！』と住職は叫んだ——『みな私の手落ちだ！　——酷い私の手落ちだ！……お前の身體中くまなく經文を書いたに——耳だけが殘つて居た

！其處へ經文を書く事は納所に任したのだ。處で納所が相違なくそれを書いたか、それを確かめて置かなかつたのは、重重私が悪かつた！……いや、どうもそれはもう致し方のない事だ――出來るだけ早く、その傷を治すより仕方がない……芳一、まア喜べ！――危險は今全く濟んだ。もう二度とあんな來客に煩はされる事はない』

親切な醫者の助で、芳一の怪我は程なく治つた。この不思議な事件の話は諸方に廣がり、忽ち芳一は有名になつた。貴い人々が大勢赤間ケ關に行つて、芳一の吟誦を聞いた。そして芳一は多額の金員を贈り物に貰つた――それで芳一は金持になつた……しかし此の事件のあつた時から、この男は耳無芳一といふ呼び名ばかりで知られて居た。





# 約束

『この秋早々歸ります』と、數百年前、赤穴宗右衛門がその義弟丈部左門と別れる時、云つた。時は春、場所は播磨國加古村。赤穴は出雲の武士であつた、それで彼は鄉里を訪れようと思つた。

丈部は云つた――

『あなたの出雲、――八雲立つ出雲の國は甚だ遠い。それ故恐らく或る定まつたお歸りの日を約束なさる事はむづかしいでせうが、もしその日が分つたら私共は幸に思ひます。さうしたら、私共は歡迎の宴の用意ができます。そしてお出でになるのを門に出て見張つて居られ

ます』

『さあ、その事については』赤穴は答へた、『私は旅にはよく慣れて居るから、或る場所に着くのはどれ程かかるか豫め云ふ事ができます、それで定つた日にここへ着く事は安心して云へます。重陽の佳節ときめて置いてどうでせう』

『それは九月九日ですね』丈部は云つた、――『その頃は菊の花も咲くから、一緒に菊見もできます。愉快愉快。……それぢやお歸りは九月九日と約束して下さいますね』

『九月九日』赤穴は別れの微笑を見せながら、くりかへした。それから彼は播磨の國加古村から、大股に歩き出した、――そして丈部左門とその母は、眼に涙を浮かべてそのあとを見送つた。





『月日に關守なし』と古い日本の諺は云ふ。速かに幾月か過ぎ去つた、そして秋――菊花の季節――が來た。そこで九月九日の早朝から丈部は彼の義兄を歡迎する用意をした。品々の肴を調へ、酒を買ひ、客間を飾り、床の間の花瓶には二色の菊花を挿した。その時、これを見てゐた母は云つた、――『出雲の國はここから百里以上もあります。山を越えてそこから來る旅は苦しくて疲れませう、赤穴が今日來る事ができるかどうかは、あてにならない。そんなに骨を折らないで、來るのを待つてからにしてはどうかねね』『いゝえ、母樣』丈部は答へたやありません。到着してから用意を始めるのを見たら、私達はあの人の言葉を疑つたと思ひませう、それが恥かしい』

その日は美はしく、空には一點の雲もなく、空氣は澄渡つて世界はいつもより千里も廣くなつたやうに思はれた。朝のうち、多くの旅人は村を通つた――武士も幾人かあつた、そして一人一人の通るのを見守つてゐた丈部は、度々赤穴が近づくのを見たやうに思つた。しかし寺の鐘が正午を知らせたが、赤穴は見えなかつた。午後も續いて丈部は見張つて待つて見たが無駄であつた。日は沈んだ、しかしやはり赤穴の來るやうすはなかつた。それでも丈部は門に立つて往來を眺めてゐた。やがて母は來て云つた、――『諺に云ふ通り――男の心は秋の空のやうに早く變る事もあらう。しかし菊の花は明日も未だ鮮かであらうから、もう床についてはどうか、明朝になつてから、又赤穴を待つたければ、待つ事にしては』

『母樣、お休みなさい』丈部は答へた、『しかし私はやはり來るとしか信じられません』それから母は寢





室に行つて、丈部は門にたゝずんでゐた。

夜は晝のやうに澄んでゐた、空には一面に星が動いて、銀河は異樣の光をもつて輝いてゐた、――靜けさを破る物は、ただ小川の音とはるかに吠える犬の聲だけであつた。丈部はやはり待つた、――細い月が近くの山のうしろに沈むのを見るまで待つた。その時やうやく彼は疑ひ恐れ始めた。丁度家に戻らうとした時、彼は遠くからたけの高い人が――甚だ輕く、かつ速く、――近づいて來るのを見た、そして直ちにそれが赤穴である事を認めた。

『やあ』丈部は彼を迎へるために、跳び出して叫んだ、――『朝から今まで待つてゐました。……やはり約束を守つて下さつたね。……しかし兄樣、あなたはきつと疲れたでせう、――入つて下さい、――何でも用意してあります』彼は客間の正座へ赤穴を案内して、急いで

細くなりかけて居るあかりを直した。丈部は續けて云つた、『母は今晩少し疲れて居るのでもう寢ました。しかし、やがて起しませう』赤穴は頭を振つて、不承諾の身振をちよつと示した。『兄樣、それではあなたの好きなやうに致しませう』と丈部は云つて、この旅客の前に暖い酒肴を置いた。赤穴は酒にも肴にも手を觸れないで、暫く動かないで、默つてゐた。それから、母を起す事を恐れるかのやうに――さやきの聲になつて、云つた。

『こんなにおそく來るやうになつたわけを、これから云はねばならない。私が出雲へ歸ると、人々は以前の君主塩冶殿の厚恩を忘れて、あの富田城を取つた謀叛人の經久に媚を呈して居るのを見た。從弟の赤穴丹治が經久に仕へて、その家臣として富田の城内に住居して居るのを訪れねばならなかつた。彼は私に經久の前に出るやうに勸めた、





私は新しい君主の顏を見た事がないから、主にその人の性格を見るためにその勸めに應じた。經久は熟練なる軍師で、非常な勇氣があるが、狡猾で殘忍である。私はこの人に仕へる事は決してできない事を知らして置く事を必要と思つた。その面前を下ると、彼は私の從弟に命じて私を留めた、――家の中から私を出さないやうにした。私は九月九日に播磨へ歸る約束のある事を云張つたが、出る事を許してくれなかつた。それで私は夜城から逃出さうと思つたが、たえず見張がついてゐたので、たうとう今日まで約束を果す方法は見出せなかつた……』

『今日まで！』丈部は驚いて叫んだ、――『城はここから百里以上もある』

『さうです』赤穴は答へた、『人は一日に百里を行く事はできない。しかし、約束を守らなければ私はよくは思はれない事を思うた、それ

から私は「魂よく一日に千里を行く」と云ふ古い諺を思ひ出した。幸にして私は刀を携ふる事を許されてゐた、――それでやうやく私は歸つて來る事ができた。……母上を大事にして下さい」

かう言つて、彼は立上つて同時に消えた。

その時丈部は赤穴が約束を果すために自殺した事を知つた。

未明に丈部左門は出雲の國富田城に向かつて出發した。松江に着いて彼はそこで九月九日に赤穴宗右衛門は城内の赤穴丹治の家で切腹した事を聞いた。それから丈部は赤穴丹治の家に行つて、丹治の信義のない事を責めて、家族の面前で彼を殺して、自分は怪我もしないで逃れた。それから經久がこの話を聞いた時、丈部を追はせないやうに命令を出した。卽ち經久自らは亂暴な殘忍な人ではあつたが、外の人の





信を愛する事を尊敬して、丈部左門の友情と勇氣を感嘆する事ができたからであつた。

# 停車場にて

昨日福岡から電報で、そこで捕へられた重罪犯人が、今日裁判のために正午着の汽車で熊本に送られる事を知らせて來た。一人の警官がその罪人護送のために福岡へ出張してゐた。

四年前一人の強盜が夜相撲町の或る家に押入つて、家人をおどかして縛つて、澤山の貴重品を奪ひ去つた。警官のために巧に追跡されてその盜賊は二十四時間内に贓品を賣捌く間もないうちに捕へられた。しかし警察署へ送られる途中鎖を切つて、捕縛者の劍を奪つて、その人を殺して逃げた。先週までそれ以上その盜賊の事は何も分らなかつ

た。

それから熊本の探偵がたまたま福岡監獄を見に行つて、その囚徒のうちに彼の頭腦に四ケ年間寫眞を焼きつけたやうになつてゐた顔を見た。看守に向かつて『あれは誰です』と尋ねた。『ここでは草部と記入されて居る窃盗犯です』と答があつた。探偵は囚人に近づいて言つた、——

『お前の名は草部ぢやない。野村貞一、お前は殺人犯の件で熊本へ御用だ』その重罪犯人は悉く白狀した。

私は停車場への到着を目撃するために大勢の人々と一緒に行つた。私は憤怒を聞き又見る覺悟をしてゐた。私は暴力の行はるべき事をさへ恐れてゐた。殺された警官は大層人望があつた。その親戚は必ずそ





の見物のうちに居るだらう、それから熊本の群集は甚だ穏かとは云へない。私は又澤山の警官が警戒に當つて居る事と思つた。私の豫想はまちがつてゐた。

汽車は忙しさと騒しさのいつもの光景、下駄をはいて居る乘客の急ぎ足とカラコロ鳴る音、日本の新聞と熊本のラムネを賣らうとする子供の呼聲のうちに止つた。

埒の外に私共は五分間程待つてゐた。その時警部によつて改札口から押されて罪人が出て來た、頭をうなだれてうしろ手に繩でしばられた大きな粗野な樣子の男であつた。罪人と警官と兩方共改札口の前にとまつた、そして人々は前に押出て、しかし默つて、見ようとした。その時警官は大聲で呼んだ、——

『杉原さん、杉原おきび、來てゐますか』

背中に子供を負うて私のそばに立つててゐたほつそりした小さい女が『はい』と答へて人込の中を押わけて進んだ。これが殺された人の寡婦であつた、負うてゐた子供はその人の息子であつた。役人の手の合圖で群集は引下つて囚人とその護衛との周圍に場所をあけた。その場所に子供をつれた女が殺人犯人と面して立つた。その靜かさは死の靜かさであつた。

少しもその女にではなく、ただ子供だけに向かつてその役人は話した。低い聲であつたが、大層はつきりしてゐたので、私は一言一句き く事が出來た——

『坊つちやん、これが四年前にお父さんを殺した男です。あなたは未だ生れてゐなかつた。あなたは母さんのおなかにゐました。今あなたを可愛がつてくれるお父さんがないのはこの人の仕業です。御覽な



さい、（ここで役人は罪人の顎に手をやつて嚴かに彼の眼を上げさせた）よく御覽なさい、坊つちやん。恐しがるには及ばない。厭でせうがあなたのつとめです。よく御覽なさい』

母親の肩越に男の子はすつかりあけた眼で恐れるやうに見つめた、それからすすり泣を始めた、それから涙が出た、しかし畏縮しようとする顏をしつかり、そして從順に、續いて眞直にじつと見て、見て、見ぬいた。

群集の息は止つたやうであつた。

私は罪人の顏の歪むのを見た、私はその鎖も構はないで突然倒れて跪いて、そしてその間聞いてゐる人の心を震はせるやうに悔恨の情極つたしやがれ聲で叫びながら、砂に顏を打ちつけるのを見た、——

『ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、坊つちやん。

そんな事をしたのは怨があつてしたのではありません、逃げたさの餘り恐しくて氣が狂つたのです。大變悪うございました、何とも申しわけもない悪い事を致しました。しかし私の罪のために私は死にます。死にたいです。喜んで死にます、だから坊つちやん、憐れんで下さい、勘忍して下さい』

子供はやはり默つて泣いた。役人は震へて居る罪人を引起した、沈默の群集はそれを通すために左右へ分れた。それから全く突然全體の群集はすすり泣を始めた。そしてその日にやけた警官が通つたとき、私は前に一度も見た事のない物、めつたに人の見ない物、恐らく再び見る事のない物、卽ち日本の警官の涙を見た。

群衆は退散した、そしてこの光景の不思議な教訓を默想しながら私は殘つた。ここには罪悪の最も簡單なる結果を悲痛に示す事によつて罪悪を知らしめた容赦をしないが同情のある正義があつた。ここには死の前に只容赦を希ふ絶望の悔恨があつた。ここには凡てに感じ、悔悟と慚愧に滿足し、そしてままならぬ浮世と定め難き人心をただ深く經驗せるが故に憤怒でなく、ただ罪に對する大なる悲哀を以てみたされた群衆（怒つた時には恐らく帝國に於て最も危險な群衆）があつた。





しかしこの一挿話のうち、最も東洋的であるから、最も著しい事實は、罪人の親たる感じ、どの日本人の魂にも一大分子となつて居る子供に對する潛在的愛情に訴へて悔恨を促した事であつた。

日本の盜賊のうちで最も名高い石川五衞門が或る夜人の家に入つて殺して盜まうとした時、自分に手をさしのべた子供の笑顏に氣をとられて、その子供と遊んでゐて、遂に自分の目的を果す機會が全く失はれたといふ話がある。

この話を信ずる事はむづかしくはない。毎年職業的犯罪者が小兒に對して憐を示した事が警官の記錄にない事はない。數ケ月前地方の新聞に恐るべき殺人事件（盜賊が一家をみなごろしにした事件）が記されてあつた。眠つて居る間に七人の人が文字通り寸斷されたが、警官は一人の小さい子供が全く害をうけずに血溜りに獨りで泣いて居るのを發見した。警官は加害者がその小兒を害しないやうにと余程注意したに相違ない事の疑のない證據を見出した。





# 果心居士

天正年間、京都の北の方の町に、果心居士と云ふ老人がゐた。長い白い鬚をはやして、いつも神官のやうな服裝をしてゐたが實は佛畫を見せて佛教を說いて生活を營んでゐたのであつた。晴天の日にはいつも祇園の祠の境內で、木に大きな掛物をかけるのが習慣であつた、それは地獄變相の圖であつた。この掛物はそれに描いてある物が悉く眞に逼つて巧妙にできてゐた。そして老人はそれを見に集つて居る人々に見せて、携へてゐた如意をもつて色々の責苦を詳しく說き示し、凡ての人に佛の教に從ふやうに勸めて、因果應報の理を說いてゐた。そ

の繪を見て、それについて老人の說教するのを聞くために、人が群をなして集つた、そして喜捨を受けるためにその前に敷いてあるむしろは、そこへ投げられた貨幣の山で、表面が見えない程であつた。

その當時、織田信長が畿内を治めてゐた。彼の侍臣荒川某、祇園の祠へ參詣の途中、偶然そこでその掛物を見て、あとで殿中に歸つてその話をした。信長は荒川の話を聞いて興味を感じ、直ちに果心居士に幅を携へて參上するやうに命じた。

掛物を見た時、信長はその繪のあざやかさに驚いた事を隱す事はできなかつた、鬼卒及び罪人は實際彼の眼前に動くやうであつた、そして彼は繪の中から叫號の聲を聞いた、そしてそこに描いてある鮮血は實際流れて居るやうであつた、——それで彼は、その繪が濕れて居るのではないかと指を觸れて見ないわけに行かなかつた。しかし指は汚





れなかつた、——卽ち紙は全く乾いて居るからであつた。益々驚いて信長はこの不思議な繪の筆者を尋ねた。果心居士はそれに對して、それは名高い小栗宗丹が、——靈感を得んがために清水の觀世音に熱心に祈り、百日の間每日齋戒を行つたあとで、——描いた事を答へた。

その掛物をたしかに信長が所望して居る事を見て、荒川はその時果心居士にその幅を信長公に獻上してはどうかと尋ねた。しかし老人は大膽に答へた、——『この繪は私のもつて居る唯一の寶で、それを人に見せて少し金を儲ける事ができるのです。今この繪を信長公に獻上すれば、私の生計の唯一の方法がなくなります。しかし、信長公が是非お望とあれば、黃金壹百兩を頂きたい。それだけのお金で、私は何か利益のある商賣でも始めませう。さうでないと、繪はさし上げられ

ません』

信長はこの答を聞いて、喜ばないやうであつた、そして默つてゐた。

荒川はやがて何か公の耳にささやいたが、公は承諾したやうにうなづいた、それから果心居士は少しのお金を賜はつて、御前から引下がつた。

しかし、老人が屋敷を離れると、荒川はひそかに跡を追つた。

奸計をもつてその繪を奪ひ取るべき機會を得ようとしたのであつた。その機會は來た、果心居士は郊外の山の方へ直ちに通ずる途に偶然さしかかつたからであつた。彼が山の麓の或る淋しい場所に達した時、彼は荒川に捕へられた。荒川は彼に云つた、――『その幅に對して黃金百兩を貪るのは何と云ふ慾張だらう。黃金百兩の代りに、三尺の鐵





の一片をやる』それから荒川は劍を拔いて老人を殺して、幅を奪つた。

翌日荒川は掛物を――果心居士が信長の邸を退出する前に包んだ通りに包んだままで、信長に獻上した、信長は直ちにそれを展いて掛ける事を命じた。しかし展いて見ると、信長も彼の侍も二人とも、繪は全く無い、ただ白紙だけである事を見て驚くばかりであつた、荒川はどうして、もとの繪が消失せたか說明ができなかつた、そして彼は――『知つてか或は知らないでか――主人を欺いた事について罪がある』ので、處罰されるときまつた。それで彼は長い間閉門蟄居を命ぜられた。

荒川の閉門の時期が終るか終らないうちに、果心居士が北野の祠の

境内にその名高い繪を見せて居ると云ふ通知があつた。荒川は殆どその事を信ずる事ができなかつた。しかしその通知を得て、彼の心にどうにかしてその掛物を奪つて、それで先頃の失策を償ふ事ができさうな望が湧いて來た。そこで彼は急いで從者の幾人かを集めて、寺に急いだ、しかし彼がそこに達した時に、彼は果心居士が去つてしまつたと云はれた。

幾日か後に、果心居士がその繪を清水堂で見せて、大きな群集に對して、それについて說教して居る事が知れて來た。荒川は大急ぎで清水へ行つた、しかし、そこに着いた時、群集は丁度散つて居るところであつた、——卽ち果心居士は再び消えて、ゐなかつたのであつた。

たうとう或る日の事、荒川は思ひがけなく或る酒店で果心居士を認めてそこで彼を捕へた。老人は自分の捕へられたのを見て、機嫌よくただ笑ふだけであつた、そして云つた、——『一緒に行つて上げるが、少し酒を飮むまでお待ちなさい』この要求には、荒川は異存はなかつた、そこで果心居士は十二の大杯を飮みつくして、觀て居る人々を驚かした。十二杯目を飮んでから少し滿足したと云つた、それから荒川は命じて彼を繩でしばつて信長の邸へ連れて行つた。

邸の取調所で、果心居士は、直ちに奉行の取調を受けた、そして嚴しく責められた。最後に奉行は彼に云つた、——『お前は魔術で人を欺いてゐた事はたしかだ、その犯罪だけで、お前はひどい罰を受ける資格がある。しかしもしお前がその繪を信長公に恭しく獻上すれば、今度はお前の罪は大目に見てやる。さもなければ、甚だ重い罰を必ず課する事にする』

このおどかしを聞いて果心居士は困つたやうな笑ひ方をした、——

『人を欺くやうな罪を犯したのは私ではない』それから、荒川に向かつて、彼は叫んだ、——『お前こそそうそつきだ。お前は繪をさし上げて信長公に諂はうとした、そしてそれを盗むために私を殺さうとした。罪と云つたら、これ程の罪はどこにあるか。幸にして、お前は私を殺す事はできなかつた、しかし、お前の望通りにできたらその行に對してどんな辯解ができるか。とにかく、繪を盗んだのはお前だ、私のもつて居る繪はただの寫しだ。お前が繪を盗んでから、信長公に獻上する事がいやになつたので、その秘密の行や心をかくすために、その罪を私に着せて、私が本物の繪を白紙の掛物と取替へたと云つて居るのだ。どこに本物の繪があるか私は知らない。多分お前は知つて居るのだらう』

かう云はれて、荒川は怒の餘り、驅け寄つて、果心居士を打たうとしたが、番人等に遮られて果さなかつた。しかしこの不意の怒の破裂は、奉行に荒川が全く無罪ではあるまいと思はせる事になつた。暫く、果心居士を獄に下してから、奉行は荒川を嚴しく調べにかかつた。ところで荒川は元來訥辯であつたが、この場合、殊に興奮の餘り、殆ど云ふ事ができないで、吃つたり、撞着したりして、どうしても罪のありさうな形跡を表はした。そこで奉行は、荒川を打つて白狀させるやうに命じた。しかし事實の白狀らしい事も彼にはできさうになかつた。そこで彼は鞭で打たれて、感覺を失つて、死人のやうになつて倒れた。

果心居士は獄にゐて、荒川の事を聞いて笑つた。しかし少ししてから、彼は獄吏に向かつて云つた、——『あの荒川と云ふ奴は全く姦邪の振舞をしたので、私は態とこの罰を與へて、彼の悪い心根を懲らし

てやらうとしたのだ。しかし、荒川は事實を知らないに相違ないから、それで私はよく分るやうに一切の事を説明しますと今奉行に傳へてくれ給へ』

それから果心居士は再び奉行の前に連れられて、つぎのやうな宣言をした、――『本當に優れた繪ならどんな繪にも魂がある、そして、そんな繪には自分の意志があるから、自分に生命を與へてくれた人から、或は又正しい所有者から、離れる事を好まない事がある。眞の繪には魂がある事を證明するやうな話が澤山ある。昔、法眼元信が襖に描いた雀が何羽か飛んで行つて、そのあとが空になつた事はよく知られて居る。掛物に描いてある馬が毎夜草を喰ひに出かけた事もよく知られて居る。ところで、今の場合では、事實はかうだと私は信ずる、卽ち信長公は私の掛物の正當の所有者ではなかつたから、繪が信長公





の面前で展かれた時、紙の上から自分で消えたのであらう。しかし、もし私が始めに云つた通りの價段、――卽ち黄金壹百兩、――をお出しになれば、その時は私の考では、繪はひとりで今白紙になつて居るところへ現れませう。とにかく、やつて見てはどうです。少しも危い事はない、――繪が現れなければ、金は直ちに返すまでの事だから』

こんな妙な斷言を聞いたので、信長は百兩を拂ふ事を命じて、その結果を見るために親しく臨席した。それから掛物は彼の前で展かれた、そして列席者一同の驚いた事には、その繪は、悉く詳細に現れた。しかし色が少しさめて、亡者と鬼卒の形が、前のやうに生きて居るやうでなかつた。この相違を見て、信長公は果心居士に向かつて、その理由を説明するやうに求めた、そこて果心居士は答へた、――『始めて御覽になつた繪の價値は、どんな價もつけられない繪の價値でした。

しかし御覽になつて居る繪の價値は、正にお拂になつた物――即ち黃金壹百兩――を表はして居ります。……外に仕方がございません』こ の答を聞いて列席の人々は、もうこれ以上この老人に反對する事は到底無效である事を感じた。彼は直ちに赦された、そして荒川も亦赦された、彼の受けた罰によつて彼の罪は十二分に償はれたからであつた。

ところで、荒川に武一と云ふ弟がゐたが、――やはり信長の侍であつた。武一は荒川が打たれて獄に入れられたのを非常に怒つて、果心居士を殺さうと決心した。果心居士は再び放免されるや否や、酒屋へ行つて酒を命じた。武一はそのあとから店に入つて、彼を斬倒し、首を切落した。それから老人に拂はれた百兩を取つて、武一は首と金とを一緒に風呂敷に包んで、荒川に見せるために家に急いだ。しかし彼





が包を解いて見ると首と思つたのは空の酒德利で、黃金は土塊であつた。……それから間もなく、首のない體は酒屋から歩き出して、――どこへだか、いつだか誰も知らないが、――消失せた事を聞いて、この兄弟は益々驚くばかりであつた。

一月ばかり後まで、果心居士の事は知られなかつた、その頃になつて、信長公の邸前で、遠雷のやうな大鼾をして寢て居る一人の泥醉者があつた。一人の侍が、その泥醉者卽ち果心居士である事を發見した。この無禮な犯罪のために、老人は直ちに捕へられて牢に入れられた。それでも眼をさまさない、そして牢で彼は十日十晩間斷なく眠り續けた、――その間たえずその高鼾が餘程遠くまで聞えた。

この頃に、信長公は部下の一人である明智光秀の反逆のために死ぬやうになつたので、光秀がそれから政を取つた。しかし光秀の権力は十二日しか續かなかつた。

ところで、光秀が京都の主人になつた時、彼は果心居士の事を聞いた、それから命じて、その囚人を彼の前に出させた。そこで果心居士は新しい君主の面前に呼ばれた、しかし光秀は彼に丁寧な言葉をかけて、賓客として待遇し、そして立派な饗應をするやうに命じた。老人に御馳走をしてから、光秀は彼に云つた、『聞くところによれば、先生は大層お酒が好きださうです、一度にどれ程めし上がりますか』果心居士は答へた、——『量はよくは知らんが酔へば止めます』そこで光秀公は果心居士の前に大盃を置いて、侍臣に命じて老人の飲めるだけ、幾度となく、酒を注がせた。そこで果心居士は、續いて十





度大盃を飲干して、さらに求めたが、家來は酒が盡きた事を答へた。列席の人々で、この強酒ぶりに驚かない者はなかつた。そこで光秀公は果心居士に尋ねた、『先生、未だ不足ですか』『はい、少し滿足しました』果心居士は答へた、——『ところで御親切の御返禮として、私の技を少し御覽に入れませう。どうかその屏風を見てゐて下さい』彼は大きな八曲屏風を指した、それには近江八景が描いてあつた、そのうちの一つに、湖上遙かに舟を漕いで居る人があつた、——その舟は屏風の表面では、長さ一寸にも足りなかつた。果心居士は舟の方へ手をあげて招いた、すると舟が突然向き直つて、繪の前面の方へ動き出すのが見えた。近づくに隨つて段々大きくなつた、そして船頭の顔つきが、はつきり認められるやうになつて來た。やはり段々舟が近くになつて來た、——いつでも大きくなつて、——たうとうそれが近くに

見えて來た。それから突然、湖水が溢れて來るやうであつた、——繪から、部屋へ、——そして部屋は洪水になつた、そして水が膝の上まで達したので見物人は急いで着物をかかげた。同時に舟が、——本當の漁船が、——屏風の中から、滑り出すやうであつた、——そして一丁の艪の軋る音が聞えた。やはり部屋の中の洪水は增す一方であつたので、見物人は帶まで水に浸つて立つてゐた。それから舟は果心居士のところへ近づいて來た、そして果心居士はその舟に上つた、そこで船頭はふりかへつて、甚だ速かに漕ぎ去らうとした。それから舟が退いた時、部屋の水は急に低くなつて、——屏風の中へ退却するやうであつた。舟が繪の前面と思はれるところを通過するや否や、部屋は再び乾いた。しかし、やはり繪の中の舟は、繪の中の水の上を滑るやうであつた、——段々遠くへ退いて、段々小さくなつて行つて、たうとう



最後に沖の中の一點となつて小さくなつた。それから、それは全く見えなくなつた、そして果心居士はそれと共に消えた。彼は再び日本には現れなかつた。

# おばあさんの話

恐らく現存せる他の如何なる人種と雖も、今私が話したいと思つて居るやうな人を生ずる事はできなかつたらう。この婦人は私共西洋の人々が想像もできない程やかましい又嚴しい社會的訓練——一種特別の理想を實現せんがために、婦人の天性のみ加へられた訓練によつて大成されたのであつた。

その想像された型の婦人は、他人のためにのみ働き、他人のためにのみ考へ、他人のためにのみ生きる婦人である、——この上もなく情け深く、この上もなく無私無我で、自分を思ひ切つて人の犧牲にして

ゐながら、その報いを受ける物とも思つてゐない婦人である。私の云つたこんな特別の訓練や教訓で幾代かの少女が養成されたあとで、實際その型の婦人が現れたのであつた、その性格は蟻や蜂と同じやうに、利己主義と云ふ物がない、我儘と云ふ事はできない、不親切な事を考へる事もできない、——その性格のできた社會を除いて、如何なる種類の人間社會にも餘りかけ離れて善良過ぎる性格である。勿論の事だが、この型の人は例外となつてゐた、決して多數にはならなかつた。しかし舊日本では少くともただ模範として考へられる程普通にあつた、——婦人の性質が修養によつてなれるよい證據であつた、そしてそれは靜かに愛せられ、習はれてゐた。それには澤山の種類があつた、私は最も簡單な物を一つ叙述しようと思ふ、——私の最もよく知つて居る物を。





ほつそりした小さい黒い着物の婦人で、梅干のやうに皺のある舊式の顔をして居る。六十八歳だが髪は未だ烏の翼のやうに黒い、——即ち本當の日本風に青黒色である、それから齒は未だ悉く完全で、若い娘の齒のやうに白くて強い、（これまで齒痛と云ふ物を知らない）それから眼は子供の眼のやうに輝いて鋭敏である、（物を讀んだり、針仕事をしたりする時でも、眼鏡が要らない）その上彼女は未だ大層元氣で、どこかの祭禮に行つて、孫を喜ばせるやうな物を買ふために、四哩や五哩を歩く事を何とも思つてゐない。彼女の驚くべき健康の大部分は、珍しい遺傳であるに相違ない、しかし私は考へるに、幾分は彼女の生活の單純なところからも來て居るに相違ない。彼女は肉食やその他の美食は何もしない、そして彼女は米、果物、野菜以外の食物

を試みるやうにいくら勸められても應じた事は中々ない。魚でも食べようとはしない、生き物を食物のために殺す事は悪いと眞面目に信じて居るからである。

彼女は殆ど病氣をした事はない、そして病氣の時には藥よりも御祈禱を信じて、神や佛に全然自分を任せる。しかし自分の孫か誰か病氣になると——それは別問題である、彼女は藥師如來に祈るために實際藥師堂に行く、しかし彼女は大急ぎで先づ新しい西洋醫者を呼ぶ。一生のうちにただ一度藥を飲む事を勸められて承知し、長い間看護されるままになつてゐた事があつた。放れ馬に蹈まれようとする子供を助ける時、自分がうつむきに倒れたので、右の頬骨に燧石の尖つたかけが一つ深く入つたのであつた。それで必要上手術をして生命をとりとめたが、名譽の負傷のあとが永久彼女に殘つた。





天氣の變りなどは彼女には何の意味もないやうだ。極寒の時の外は彼は火の側に行つて手を暖める事は決してしない、そして冬の日に縁側に坐つて、外氣が好きだから日光の當るところで針仕事をする。すき間風などのために困ることはないやうだ。

彼女の一生はいつでもさうであつたが、今でも他人のためのたえざる働きの連續である。夏でも冬でも同じく、彼女は太陽と共に起きる、女中を起す者、子供等に着物を着かへさせる者、それから朝の食事の準備を指圖する者、祖先の位牌の前の供物を案ずる者は皆彼女である。子供は五人ある、そして長男の外は皆凡ての事について彼女の助を必要とするやうである。そして彼女は何か變つた仕方で、彼等を滿足させるやうに工夫する。

戸内では、眠つて居る時の外は、手を遊ばして居る事はない、何も

しないで居るのを見た人はかつてない。卽ちただ休息のために、或は話をするために、或は話を聽くために、手を休めて坐つて居るのを見た人はかつてない。大概の時は子供等のために、息子と嫁のために、それから女中等のためにも針仕事をする、——そのわけは、絹の帶、禮服等のやうな特別の仕立方をすべき何か特別の品でない限り、彼女は仕立物を一切外へ出さないからである。根氣よく綺麗に、殆ど機械的に、彼女は針仕事をする、そして彼女は殆ど凡ての家の道具、蒲團、座蒲團、カーテン、枕、その外の物をつくつた、或はつくる事の監督をした。

彼女の親身でない限り、家のお客で彼女に會つた者はない。親類でも彼女は話をするために坐り込む事はない、自分の仕事を一時止める事を罪の深い時間の浪費と思つて居るからである。彼女が子供の着物





や、蠶や、野菜畠や、食事の準備の世話をして居る時だけ、人は彼女と話をする事ができる。お客に出される物は何でも彼女の命令によつて用意される、しかも彼女の存在はただ傳說のやうにしか彼等に知られてゐない。

彼女は決して陰氣ではないが、甚だ默り勝である。子供と子供らしい話をしたり、お伽話に耽つたりするのを除けば——彼女は言葉で話すよりも顏つきや、微笑で話す方がもつと多い。彼女は愉快な面白い微笑をするので、誰にでも好かれる。何時間でも引續き坐つて針仕事をして少しも物を云はない。これは大概古い武士の練習の結果である。餘計な話は女の主なる缺點の一つと考へられて來た、その缺點を彼女はたしかにもつてゐなかつた。大人には必要な時、或は少しの言葉で大層喜ばれる時、或は自分の助言が必要である事の分る時、そんな時

だけ話す。

日中外出する事があれば、子供をどこか面白いところへ、——いつも氏神のお祭へ——或は何か宗教の儀式にお参りに、——連れて行くためである。さもなければ彼は夜外出するだけである、——その時彼女は家のために買物をする、又子供等のために妙なおもちやを買ふ。こんな時に彼女はいつでも女中を伴ふ、そして彼女はその女中に何か買つてやる。

彼女の一生は、日向で彼女の側にいつも坐つて居る古い飼猫の一生と同じく平穏で、人の目には少くとも同じやうに反省的でないと思はれるかも知れない。しかも彼女の一生はいつでも反省の一生であつた澤山見たり、聞いたり、考へたりして来た、そして彼女の心には誰にも思ひよらない深い智慧の淵があつて、そこから彼女の愛する者が必





要の時に酌出す事ができる。疑惑や困難の時、彼等は彼女に恭しく助言を求める。丁度人が神託を求めるやうに、彼女は直ちに答へる事はない、坐つて針仕事をしながら考へる、それから多分餘程たつてから彼女は云ふ、——『かうしてかうすれば、多分よいでせう』彼等はいつまでも彼女の助言通りにする、そして結果はいつでも彼女の豫言通りになる。そこで彼等はこれは彼女が人生の境のたそがれのうちに入つて居る、——それで今では神に餘程近くなつて居るからであると考へる。

これまで一生彼女を知つて居る老人達は、彼女の不親切な言葉を發したのを聞いた事がないと斷言する。彼女はひどい目に會つた、——多くの士族達が狡猾な金貸のために沒落した時代に殘酷な目に會つた、

その上彼女は愛する者の多くに死別した。しかし彼女の苦痛と悲嘆を口へは出さなかつた、そして彼女は怒を表はす事はしなかつた。罪悪については、彼女は佛の教の通りに考へて居る、卽ちそれは悉く無明、愚痴、煩惱、――憐むべき物と考へて居る。彼女の心には憎惡の餘地は少しもない。

彼女は智慧を與ふる慈悲の大教主釋迦の教に從つて一生を送つて來た。不善をなす事ができないで、――たえず進んで善をなす事に專心して居るから、――たしかにこんな人は餘程神に近いのである。それで人は彼女は再び生れかはつて來ないと云ふ、――彼女はこの世から直ちに無限の光明界に入ると云ふ。……私も彼女は再び生れかはつて來る事はないと思ふ――少くとも今後五萬年の間は。彼女を生ずる事のできる境遇はすでになくなつた、そして來るべき新社會では彼女のやうな性格の人は生存する事ができない。

# 濱口五兵衞

有史以前から日本の海岸は、數世紀の不規則なる間を隔てて非常に大きな海嘯——地震、或は海底の火山の働のために起る海嘯のために掃去られて居る。この恐しい海の不意の膨脹を日本人は津浪と云つて居る。最後の津浪は一八九六年（明治二十九年）六月十七日の夕方に起つた、その時には殆ど二百哩程の長さの津浪は宮城、岩手及び青森の東北の諸縣を襲うて數百の都市と村落とを破壞し、いくつかの地方を全滅させ、そして殆ど三萬の人命を亡した。濱口五兵衞の話は日本の他の地方の海岸に於て明治時代より遙か以前に起つた同じやうな災

害の話である。

彼を有名にした事件の起つた時、彼は老人であつた。彼はその村の最も有力なる住民であつた、長い間村長であつた、そして尊敬され又愛されてゐた。人々はいつも彼をおぢいさんと呼んだ、しかし、その土地の最も富んだ人であつたので、時に公に長者と呼ばれてゐた。彼は小さい農夫に爲になるやうな事を云つてきかせ、喧嘩の仲裁をし、必要な時には金をたて替へ、そして最もよい條件で彼等のために米を賣捌いてやるやうな事をいつもしてゐた。

濱口の大きな草葺の母屋は、灣を見下す小さい高臺の端に建つてゐた。おもに米をつくつてあるこの高臺は、森のしげつた山に三方圍まれてゐた。この土地は外に向いた端の方から、水際までゑぐり取つたやうに大きな緣の四面になつて傾斜してゐた、そして一哩の四分の三





程のこの傾斜の全部は、海面から見ると狹い白いうねりくねつた道、一條の山道によつて中央を分けられた緣の大きな階段のやうに見えた。本當の村になつて居る九十の草葺の家と一つの神社が屈曲した灣に沿うて立つてゐた、そして外の家は長者の家へ通ずるその狹い坂路の兩側にしばらく續いて散在してゐた。

秋の或る夕方、濱口五兵衞は下の村でお祭の用意をして居るのを、自分の家の緣側から眺めてゐた。稻の收穫に大層好かつた、そこで村人は氏神の社の境內で踊を催して豐作を祝しようとしてゐた、老人は淋しい町の屋根の上にひるがへつて居る幟や、竹の竿の間に飾つてある提灯の列や、神社の裝飾や、派手な色のなりをした若い人々のむれを見る事ができた。その夕方老人と一緒にゐたのは小さい十歲の孫だ

けであつた。その他の人々は早くから村の方へ行つてゐた。いつもより少しからだの加減が悪くなかつたら、老人も一緒に出かけるところであつた。

その日はむしあつかつた、そして微風が起つて來たが、未だ何だか重苦しい暑さが殘つてゐた、それが日本の農夫の經驗によると、ある季節には地震の前兆である。そして間もなく地震が來た、人を驚かす程の強さではなかつた、しかしこれまで數百回の地震を感じて來た濱口は變に思つた、——長い、のろい、ふわりとしたゆれ樣であつた。多分極めて遠方の或る大きな地震のほんの餘波であつたらう。家はめきめきと云つて幾度かおだやかにゆれた、それから又靜かになつた。

その地震が終ると、濱口の鋭い思慮深い眼は、氣遣はしさうに村の方へ向いた。或る一定の場所や物を見つめて居る人の注意が、全く自





覺して見てゐない方へ　明かな視野以外にある無意識な知覺の朦朧たる範圍に於てただ少し變な感じのする方へ、不意に氣を取られる事がよくある。そんな風に濱口は沖の方に何かつねならぬ事のあるのに、氣がついた。立上つて海を見た。海は全く不意に暗くなつてそして變であつた。風と逆行して居るやうであつた。陸から向うへ退いて走つてゐた。

忽ちのうちに全村がその稀有の出來事に氣がついた。明らかに先程の地震を感じた人はなかつた。しかし潮の運動にはたしかに驚いた。一同が浪際へ、そして浪際のもつとさきへ、それを見に走つて行つた。

人の記憶ではこんなに潮の引いた事はこの海岸であつたためしはない。見た事のないものが現れ出した、これまで知られなかつた肋骨のやうな畦（うね）のある砂の廣場や、海草のからんで居る岩の區域が、濱口の

見て居る間に現れて來た。そして下の方の人はその巨大なる引潮は何を意味するかを考へる者はないやうであつた。

濱口五兵衛彼自身もこんな物を見た事はかつてなかつた、しかし彼は父の父から幼少の折に聞いた事を覺えてゐた、そして彼は海岸の凡ての傳說を知つてゐた。彼には海がどうなるか分つてゐた。多分彼は村へ使をやるのに要る時間、山のお寺の僧に大きな釣鐘を鳴らして貰ふために要る時間を考へてゐたのであらう。……しかし濱口の考へたら しい事を話す方が、濱口の考へた時間よりもはるかに長くかかるであらう。彼は只孫に向かつて云つた。

『忠、すぐ大急ぎだ……たいまつをつけて來い』

たいまつは嵐の夜に使ふために、そして又或る神事の祭禮に使ふために多くの海邊の家にしまつてある。子供はすぐにたいまつをつけた、





そして老人はそれをもつて野原に急いだ、そこには彼の大部分の投資とも云ふべき數百の稻叢があつて運ばれるばかりになつてゐた。坂の端に一番近い稻叢に近づいて老いた足で急げるだけ急いで交るたいまつをつけ始めた。日に乾いた藁はほくちのやうに燃えた、火勢をあほる海風はその焰を岡の方へ吹き上げた、そしてまもなく一叢又一叢、藁は炎になつて天に沖する烟の幾條かを上げたが、それが相集り交つて一つの大きな雲の渦となつた。忠は驚きかつ恐れて祖父のあとから叫びながら走つた。

『お祖父さん、どうして、祖父さん、どうして』

しかし濱口は答へなかつた、說明して居る暇がなかつた、ただ危難に瀕して居る四百人の生命の事ばかり考へてゐた。子供はしばらく稻の燃えて居るのを興奮して見てゐたが、突然泣出した、そして祖父さ

んは氣が狂つたと信じてうちへ驅け込んだ。濱口は稻叢の一つ一つに火をつけて遂に自分の田地のはてまで來た、それからたいまつをなげ出して、待つてゐた。その焰を見て山寺の小僧は大きな鐘をゴーンとならした、そこで村人はこの二重の訴に答へた。濱口は村人の、砂から渚をこえて、村の方から蟻のむれのやうに急いで登つて來るのを見たが、彼の待遠い眼から見れば蟻よりも早いとは思はれなかつた。それ程時刻は彼に取つては非常に長く見えたのであつた。日は沈みかかつてゐた、灣の皺のある底、それから遙か向うの斑のある土色の大きな廣がりが最後の橙色のあかりに露出してゐた、そして續いて海が地平線の方へ走つてゐた。

しかし、實際は濱口がそれ程甚だ長く待たないうちに、第一の救助隊が到着したのであつた、それは二十人程の敏速なる若い農夫達で、





直ちに消火に赴かうとした。しかし長者は兩手を以てそれを止めた。

『もやして置け』彼は命じた、『うつちやつて置け、村中の人に、ここへ來て貰ふんだ、――大變だ』

村中の人が追々來た。そこで濱口が數へた。若い男や男の子供はすぐにそこへ來た、そして元氣な女や娘達も大分來た、それから老人の大方は來た、それから赤ん坊を脊負つた母親、それから子供までも來た、――子供でも水を渡す手傳ができるからである、そして眞先にかけつけた人々と一緒について來られなかつた年長の人々が急な坂を上つて來るのがよく見えて來た。次第に集つて來た人々は、やはり何(なん)にも知らないで悲しげに不思議相に、燃えて居る野原と長者の白若たる顏とを交る交る眺めてゐた。そして日は沈んだ。

『お祖父さんは氣ちがひだ、僕は恐はい』と澤山の質問に答へて患(なや)

はすすり泣いた、『お祖父さんは氣ちがひだ、わざと稻に火をつけたんだ、僕はそれを見たんだ』

『稻の事は子供の云ふ通りだ』濱口は叫んだ、『わしは稻に火をつけたんだ。……皆ここへ來たか』

組長と家々のあるじ達はあたりを見廻し、坂を見下して答へた、

『皆居ります、でなくともすぐに參ります。……私共にはこの事が分りません』

『來た』老人は沖の方を指さし、力一杯の聲で叫んだ、『わしは氣ちがひか今云つて見ろ』

たそがれの薄明りをすかして東の方を一同は見た、そして薄暗い地平線の端の海岸のなかつたところに、海岸の影のやうな長い細い薄い線が見えた、その線は見て居るうちにふとくなつた、海岸に近づく人





の眼に海岸線が廣くなるやうに、その線は廣くなつた、しかし比べ物にもならぬ程ずつと早く廣くなつた。卽ちその長い暗がりは、絶壁のやうに聳えて、鳶の飛ぶよりももつと早く進んで來る、押かへしの海であつた。

『津浪』と人々は叫んだ、そしてその巨大なる海の膨脹が山々をとどろかす程の重さを以て、又赫々たる幕電のやうな泡沫の破裂を以て海岸にぶつかつた時、どんな雷より重い、名狀し難い衝動によつて、凡ての叫び聲と凡ての音をきく力とはなくなつた。それから一時は雲のやうに坂の上を突進して來た水烟のあらしの外何物も見えなかつた、そして人々は、ただそれにおびえて狼狽してうしろへ散つた。再び見直した時彼等は彼等の居宅の上を荒れて通つた白い恐しい海を見た。うなりながら退く時、土地の五臟六腑をひきちぎりながら退いた。再

び、三たび、五たび、海は進み又退いた、しかしその度毎に波は小さくなつた、それからもとの床にかへつて靜止した、大風のあとのやうに荒れながら。

高臺の上には暫く何の話聲もなかつた。一同は下の方の荒廢を無言で見つめてゐた、投出された岩や裂けて骨の出た絶壁の物すごさ、住宅や社寺の空しいあとへ海底からゑぐり取つて來て放り出してある藻や砂利の狼藉さ。村落はなくなつた、田畠の大部分はなくなつた、高段さへも存在しなくなつた、そして灣に沿うてゐた家のうち殘つて居るものは一つもない、ただ沖の方に物狂はしく浮沈して居る二つの藁屋根だけであつた。死を逃れたあとの恐しさ、凡ての人の損害のための茫然たる自失は凡ての口を啞にした、そのあげく濱口の聲で再び穩かに云ふのが聞えた。





『あれが稻に火をつけたわけだ』

彼等の長者なる彼は今最も貧しき人と殆ど同じ程の貧しさになつて立つてゐた、彼の財産はなくなつたからであつた、しかし彼はその犧牲によつて四百の生命を救つたのであつた。小さい忠は走つて來て手にすがつて愚かな事を云つた事の赦しを願うた。そこで人々は彼等の生存して居る理由に氣がついた、そして彼等を救うたその單純なる、おのれを忘れた先見の明に感服し始めた、そして頭立つた人々は濱口五兵衞の前に土下座をした、それから人々はそれにならつた。

それから老人は少し泣いた、一つは嬉しかつたから、一つは自分が老年で衰弱してゐて、ひどく苦しんだからであつた。

『家が殘つて居る』物が云へるやうになると直ぐに忠の頬を機械的になでながら、彼は云つた、『そして大勢の入る場所はある。それから

ら山の上のお寺もある、外の人はそこにもはいれる』

それから彼は案内してうちに入つた、人々は叫んだり、ときの聲を上げたりした。

困難の時期は長かつた、その當時一地方と他の地方との間に敏速な交通の方法はなく、そして必要な助は遠くから送られねばならなかつたからである。しかしもつと時節がよくなるに隨つて人々は濱口五兵衛に對する彼等の負債を忘れなかつた。彼等は彼を富有にする事はできなかつた、たとへできても濱口は彼等にさうする事を許さなかつたであらう。その上物品を贈る事は彼に對する彼等の崇敬の念を表はすには不足であつたらう、彼の心中の靈魂は神のやうであると信じたからであつた。そこで彼等は彼を神と宣言してその後彼を濱口大明神と





呼んだ、それよりも偉大なる名譽は與へられないと考へたからである、

又事實如何なる國にあつてももつと偉大なる名譽を人間に與へる事はできないのである。そしてその前面の上部に金の漢字で彼の靈魂のために神社を建てた、そして彼等が村を再び建てた時、彼等は彼の名を書いた札をかかげた、そして祈と供物を以てそこに彼を禮拜した。それについて彼はどんな感じがしたか私には分らない、私の只知つて居る事は下の方で彼の靈魂は神社に祭られてゐたが、彼は子供及び子供の子供と共に、以前の通り人間らしく又質素に山の上の古い草葺の家に引續き住した事である。彼が死んでから百年以上にもなる、しかし彼の神社はやはり存在して居る、そして人々は恐怖又は困厄の時に彼等を助けてくれるやうに、善い老農夫の靈魂に今も祈を捧げると云ふ事である。

# 或女の日記

この頃やや珍しい草稿が私の手に入つた、——細長い十七枚の柔かい紙を、絹の紐で綴ぢて、表紙に麗しい文字が書いてあつた。それは或る婦人が自分の結婚生活の歴史を自分で書いた日記のやうなものであつた。書いた本人が亡くなつてから、その人の持つてゐた針箱のうちに見出されたのであつた。

この草稿を貸した友人は私に、公にしてもよいと思ふだけ、如何程でも飜譯してもよいと云ふ許を與へた。私はこの無類の好機會を利用して、下層社會の婦人の思想感情、喜びと悲しみを、——丁度この婦

人が、苟も外國人がそのつつましい哀れな日記を讀まうなどとは夢にも思はないで、思ひ切つてあからさまに書殘した通り、その儘英語に直す事にした。

しかし彼女の優しい靈を尊敬してたとへこの人が生きてゐてこの文を讀むことがあつても、少しも迷惑にならないやうに、その草稿を用ふるやうにした。神聖だと思つたので省いた處もある、又たとへ註釋を加へても西洋の讀者に分りさうにない習慣や地方的信仰に關する些細な事で省いたものも少しはある。それから勿論姓名は皆變へてある。その他の點ではできるだけ原文通りにして、――直譯では充分に分らない場合の外は一句も變へた所はない。

この日記に述べてあり又暗示してある事實の外に、私は本人の履歴





などは知る所殆どない。この婦人は最下層社會の人であつた。彼女の話で見ると、三十近くまで未婚であつたらしい。妹の方が數年前から結婚してゐた。日記ではこの世間並でない事の理由は分らない。日記と一緒にあつた小さい寫眞で見ると、この人は綺麗とは云へなかつたことが分る。しかし顏付の優しいつつましげな一種人好きのする風に見える。夫はどこか大きな事務所の小使であつた、おもに夜勤であつて月給は十圓であつた。家計の助に女は煙草屋の紙卷煙草を作つた。

日記を見ると、彼女は數年學校に行つた事があるに相違ない事が分る。假名は中々巧に書けるが漢字は澤山は知らなかつたので、この日記は小學生の小女が書いたもののやうである。しかし誤のない慣れた風に書いてある。東京語（市民の通用語）で、癖のある言葉が多いが、

下卑な所は少しもない。

日常の生活さへ困難であるのに讀んで貰へさうにもない日記を、御苦勞にも書くなどとは如何なる理由だと、無理ならぬ疑を起す人もあらう。このやうな問を發する人には、昔から日本の教では悲しい時に歌や詩を作るのは、一番よい藥になつてゐる事を知らせたい。又下層社會に於ても今日でもなほ凡て喜びや悲しみの場合には歌を作ると云ふ事實を知らせたい。この日記の後半は淋しい病氣の時に書かれたのである。淋しさの餘り氣も狂ひさうな時に、おもに心を靜める爲に書いたのであらうと思はれる。死ぬ少し前には元氣も沮喪してゐた、それでこの日記の終の部分は弱い便りない肉體に對して、精神が最後の奮戰をした事を示して居るやうである。





草稿の表には『昔話』と題してあつた。昔とは數百年前の事實、或る一個人の過去つた昔の事を云ふのである。勿論この場合ではあとの方の意味に使つてある。

昔話

明治二十八年九月二十五日の夕方、向ひの家の人が來て問うた。——『御宅の御總領の事ですが、お片つきになつてもいゝのでせう』そこで返事はかうであつた。『出したい事は出したいのですが、何分支度ができてゐませんので』向ひの人は云つた。——『しかし、さきでは支度などはいらないと云ふのですから、私の云

ふ人におやりになつて下さいませんか。中々堅氣な人だと云ふ評判です。年は三十八歳です。御總領は二十六位だと思ひますから、先方へ云出して見たのですが……』

『いゝえ——二十九ですよ』と答へた。

『あゝ……それなら先方へ今一應話して見なければなりません。先方に話してから御相談に參ります』

さう云つて向ひの人は出て行つた。

翌晩、向ひの人が又來て——今度は岡田氏の細君（うちの知人）と一緒に——それから云つた。

『先方は滿足です——そこであなたも御承諾ならこの緣談は整ひます』





父は答へて、

『二人とも〔七赤金〕だから合性です——大丈夫差支ありますまい』

仲人は尋ねた、

『それでは見合は明日致すことに取計つて如何です』

父は答へた。

『全く何事も緣ですから……それでは明晩の今頃岡田さんの宅で會ふ事にして下さい』

こんな風に約束が雙方でできた。

向ひの人は翌晩岡田の宅へ私を連れて行かうと云つたが、私は何分一度踏出した以上、のつぴきならぬ事ですから、母と二人だけで參りたいと云つた。

母とその家へ行つた時「こちらへ」と云つて迎へられた。それから

始めてお互に挨拶した。しかし何だかきまりが悪くて顔を見る事ができなかつた。

それから岡田氏は並木氏（夫の姓）に向かつて『あなたは内で相談する人もないのだし、善は急げと云ふから、早速よいと思つたらきめなすつては如何ですか』

その返事はかうであつた、

『私の方は充分滿足ですが、先方は如何考へて居なさるか分りませんが』

『御覽の通りで引取つてもよいと思召すやうなら……』と私は云つた。

仲人は云つた。

『それなら婚禮の日はいつがよいでせう』





『明日はうちに居りますが、十月一日の方がいゝでせう』と並木氏は答へた。

しかし岡田氏は直ちに云つた。

『並木氏の留守の間に家の心配もあるから、明日の方がよくはないでせうか——どうでせう』

初めはそれは餘り早過ぎると思はれたが、私は直ぐに翌日は〔大安日〕であることを思ひ出した。それで私は承諾して、それから歸宅した。

父に話したら、不機嫌であつた。餘り早過ぎる、せめて三四日位の猶豫がなければならないと云つた。それから方角が宜しくない、外によくない事もあると云つた。

私は云つた、——

『でも、もう約束してしまひました。もう日を變へて下さいと頼む事はできません。實際留守の間に泥棒でも入つたら氣の毒です。方角が悪いと云つて、よしそれで死にましても私不服はございません、夫の家で死ぬのですもの……』それから又云つた。『それで明日は忙しくて後藤（妹婿）へ行く暇がありますまいから、只今行つて參ります』

後藤へ行つた、しかし會つたら、私は云ひに來た事をその儘云ふのがこはくなつた。私はただかう云つてほのめかした。

『私明日よそへ行かねばなりませんの』

後藤は直ぐに尋ねた、——

『御嫁さんにですね』

もぢもぢしながらやうやく云つた。

『えゝ』





後藤は『どんな人ですか』と尋ねた。

私は答へた、——

『私の考がきまる程、その人をよく見ることができるやうな私なら、なにもわざわざ母に一緒に行つて貰ふわけがないぢやないの』

彼は云つた。『それぢや、姉さんは一體何のために見合に行つたんです。……しかし』大分愉快さうに云ひ足した。『おめでたう』

私は云つた。『とにかく、明日の事なんです』

それから私は家へ歸つた。

さて約束の日になつて見ると（九月二十八日）どうしてよいか分らぬ程澤山用意する事があつた。それに幾日も雨降であつたので道が大層悪く、そのために一層困つた。ただ幸に、その日は雨が降らなかつ

た、私は何かこまごましたものを買はねばならなかつたが、母に何でも頼むと云ふわけにも行かなかつた、（頼みたかつたのだが）何分年の故で、母の足は餘程弱くなつてゐたから。そこで私は隨分早起をして獨りで出かけて、できるだけの事を一所懸命にしたが、それでもまだ充分準備のできないうちに午後二時になつた。

それから髪を結ひに髪結の處に、又風呂にも行かねばならず——それがまたみんな暇が取れた。それから着物を着換に歸つたが、並木氏からは何の使も來てゐなかつた。私はそれが少し心配になつた。丁度、夕飯が濟んだ時、使が來た。一同に一々暇乞を云うて居る暇さへなかつた、それからもう一生歸らない覺悟で出かけた、そして岡田氏の家に母と歩いて行つた。

そこで又母とも別れねばならなかつた。岡田氏の家内は私の世話をして、一緒に船町の並木氏の家へ行つた。

三々九度の盃事も無事にすみ、又御開きの時も思ひの外早く來たので御客は皆歸つた。

『あとには二人差向ひとなり、胸打騒ぎ、その恥かしさ筆紙につくし難し』

全く私の感じた事は、始めて兩親のうちを出て花嫁となり、知らぬ家の娘となつた事の覺えのある人にだけ分るであらう。

あとで食事の時、私は大層きまりが悪かつた。……

二三日後に夫の先妻（なくなつた）の父が私を尋ねて來て、云つた、

『並木氏は本當によい人です――堅い着實な人です。しかし小さい事にもやかましく小言を云ひ勝な人だから、氣をつけて、氣に入るやうになさるがよい』

私は初めから夫の樣子を注意して見てゐて、實際中々嚴しい几帳面な人だと思つた。それで萬事氣に逆はぬやうにしようと決心した。

十月五日が里歸りの日であつた、それで始めて二人で一緒に出かけた。途中後藤を訪れた。後藤の家を出てから、急に天氣が惡くなつて雨が降つて來た。そこで雨傘を借りて相合傘にさした。こんなにして歩いて居るのを以前の近處の人にでも見られはしないかと氣が氣でなかつたが、幸に無事に兩親の家に着いて挨拶をした。幸に雨はまもなく止んだ。





同月九日初めて一緒に芝居へ行つた。赤坂演伎座に行つて山口一座の芝居を見た。

十一月八日淺草寺に參り、それから御酉樣にも參詣した。

その年の十二月に夫と自分の春着をこしらへた。その時始めてかういふ仕事の面白い事が分つて大層嬉しいと思つた。

二十五日東大久保の天神樣に參り、そこの御庭を散歩した。

二十九年の一月十一日に岡田を訪れた。

十二日に後藤へ二人で行つて面白かつた。

二月九日『妹背山』を見に二人で三崎座に行つた。途中思ひがけなく後藤氏にあひ、それから一緒に行つた。しかし歸りには折悪しく雨降出し道がひどくぬかつた。

同月二十二日、天野で二人の寫眞をとつた。

三月二十五日『春木座』に行き『鶯塚（うぐひすづか）』の芝居を見た。

この月のうちに一緒に一同（兩親、親戚、友達）打連れて花見に行く約束をしたが中々都合よく行かなかつた。

四月十日、午前九時、二人で散歩に出た。初めは九段招魂社へ參詣し、それから上野公園まで行き、そこから淺草へ行つて觀音樣に參詣





し、また門跡樣にも參詣した。それから淺草奥山の方へ廻るつもりの處、先づ御飯をと云ふので——そこで或る料理屋へ入つた。食事をして居るうち、戸外に大喧嘩があるのかと思はれる程の大騒やら叫び聲やらが聞えた。その騒は見せもの小屋に火事が起つたからであつた。見て居るうちにも火が早く擴がつて、その町の見せもの小屋は大抵焼けた。——私共はすぐ料理屋を出て淺草公園をあちこち、見物しながら歩いた。

（つぎに原稿にはこの婦人が作つた小さい歌がある）

今戸の渡しにて
あひ見た事のなき人に
不思議に三めぐり稻荷
かくも夫婦になるのみか

初めの思ひに引かへて
いつしか心も隅田川
つがひ離れぬ都鳥
人も羨めば我身もまた
咲きみだれたる土手の花よりも
花にも増したその人と
白髪やしろになるまでも
添ひとげたしと祈り念じ

……それから、うちの方へと吾妻橋を渡つた。蒸汽で曾我兄弟の御寺の開帳に行つた。そして私共や兄弟姉妹がいつも仲よく樂しくくらせるやうにと祈つた。その晩歸つたのが七時過。





——同月二十五日、私共は『錄物の寄席』に行つた。

五月二日つつじを見に二人で大久保に行つた。

同月六日私共は招魂社へ花火を見に出かけた。

——これまで二人の間に何の風波もなかつた。そして私は二人で出かけたり見物に行つたりする時にきまりの悪い事もなくなつた。今ではお互に氣に入るやうにとばかりつとめて居るやうだ。そして、私は二人はどんな事があつても離れる事はないと信じてゐる。……私共の關係はいつもこんなに幸であるやうにと祈る。

六月十八日は須賀神社の祭禮なので父の家に招かれた。髪結が間に

合ふやうに來てくれないので大變困つた。しかし妹のおとりさんと父の家に出かけた。やがてお幸さん（かたづいて居る妹）も參り——にぎやかであつた。晩になつて後藤氏（お幸の夫）が見え、最後に私が一心に待つてゐた夫が見えた。それから大へん嬉しかつた事が一つあつた。夫と私が一緒に出かける時、よく私がこしらへた新しい春着を着ませうと云出しても、夫はその度毎に古いので澤山だと云つて聞入れなかつた。それでも今度は——父の招待だから着なければならないと思つて——新しい方を着てくれた。一同折よくこんなに集つたので皆が一層機嫌よくなつた。そして仕舞に別れる時にただ夏の夜の短かさをかこつた。

つぎのはその晩私共の作つた歌である。——



二夫婦そろうて祝ふ氏神の
　祭も今日はにぎはひにけり　　並木（夫）

氏神の祭めでたし二夫婦
　いくとせもにぎやかなりし氏神の
　祭にそろふ今日の嬉しさ　　同じく並木

祭とて一家集る樂しみは
　げに氏神の恵なりけり　　妻

二夫婦そろうて今日の親しみも

神の恵ぞめでたかりけり　　妻

氏神の恵も深き夫婦づれ　　妻

祭とて對に仕立てし伊豫がすり

今日樂しみに着ると思へば　　妻

思ひきやはからずそろふ二夫婦

何にたとへん今日の吉日　　後藤

祭とて始めてそろふ二夫婦

後のかへりぞ今は悲しき　　お幸





故郷の祭にそろふ二夫婦

語らふ間さへ夏の短夜　　お幸

七月五日に摂摩太夫のかかつた金澤亭に『三十三間堂』をきいた。

八月一日夫の先妻の一周忌につき淺草寺に參詣、それから吾妻橋のそばの鰻屋で中飯。そこに居るうちに丁度、正午の時分に地震があつた。河に近いので家が大へんゆれて、隨分恐しかつた。

先に櫻の時分に來た時大火事を見たのを思ひ出してこの地震は心配になつた。今度は雷でも落ちはせぬかと思つた。

二時頃に鰻屋を出て淺草公園に入つた。そこから鐵道馬車で神田に

行き、それから神田の涼しい處で暫く休んだ。途中父を訪ねて歸つたのは九時過。

同月十五日八幡神社の祭禮、後藤と妹と、後藤の妹と宅へ來てくれた。私は一同揃つて宮參りをしたいと思つてゐたが、この朝夫がお酒を飲過ぎたので、そこで仕方なく夫を置いて出かけた。參詣してから後藤の宅へ行き、しばらくしてから歸つた。

九月お彼岸の中日にひとりで寺參りをした。

十月十一日おたかさん靜岡より來らる。私は翌日芝居へ案内したかつたが、おたかさんは翌朝早く東京を立たねばならぬ事になつた。そ



れでも夫と私は翌晩柳盛座に赴いて『松岡美談貞忠鑑』を見物した。

六月二十二日父から賴まれた着物を仕立てはじめたが、加減が惡くて充分出來なかつた。しかし新年（明治三十年）の元日に仕上げる事ができた。

……今度は子供が生れるので大へん嬉しい。それから私は兩親が初孫をもつてどんなにか得意になつて喜びなさるかと思つた。

五月十日母と鹽釜樣へ參詣し、それから泉岳寺に參詣に出かけた。そこで四十七士のお墓や色々の寶物を拜觀した。新宿まで汽車で歸つ

た。鹽町三丁目で母と別れ、うちについたのは六時。

六月八日午後四時男子出生。母子共この上もなく健やかに見えた。子供は夫によく似てゐた。大きい黒い眼をしてゐた。……しかし大へん小さい兒であつた。八月に生るべき筈の處六月に生れたのであつた。……同日午後七時藥を飲ます時になつて、ランプの光で見ると大きな眼を開いて、その邊を見廻してゐた。その晩一晩私の母の懐に眠つてゐた。八月子だから餘程暖かくしてやらねばならないと聞いたから。夜晝懐に入れて置く事にした。

翌日——六月九日——午後六時半子供は突然死んだ。……





——『嬉しき間は僅かにて、又悲しみと變ず、生るるものはみな必ず死す』とあるは實にこの世のよい戒である。

僅か一日母と呼ばれ、ただ死ぬのを見るために子供を生んだのであつた。——本當に生れて二日位で死ぬのなら生れない方がよかつたのにと思ふ。

十二月から六月まで私は隨分病氣であつた。それからお產をしていくらかよくなつて喜んでゐた。今度の慶事につき方々から御祝を受けたが、それに子供が死んでしまつた。——本當に私は悲しさにたへない。

六月十日大久保、泉福寺と云ふ御寺で葬式を行ひ、それから小さいお墓をたてた。

その時の歌——

思ひきや身にさへかへぬ撫子に
別れし袖の露のたもとを

さみだれやしめりがちなる袖のたもとを

それから間もなく人が卒塔婆を逆さに立てて置けば、こんな不幸に再びあはないと聞かせてくれた。そんな事をするのは餘程かはいさうに思はれて、色々迷つたが、八月九日遂に卒塔婆を逆さに立てた。……

九月九日赤坂の芝居に二人で行つた。

十月十八日本郷春木座へ獨りで行き大久保彦左衛門の芝居を見た。そこで下足札をうつかりなくし、皆出てしまふまで殘らねばならなか



つた。それから漸く草履を見つけて歸る事ができた。しかし眞暗な夜で途中が大へん淋しかつた。

三十一年正月の節句に堀の伯母と友人内海さんの奥さんと話をして居る最中、急に胸が痛み出したので驚いて簞笥の上にある水天宮様のお守りを取らうとする途端に氣が遠くなつて倒れた。親切に介抱されて直ぐ正氣づいたが、そののち長い間病氣になつた。

四月十日が東京遷都三十年祭なので、父の家に集る事にした。重之助〔多分親戚〕と一緒に先に行つて、夫を待つてゐた。夫はその日朝のうち、一寸役所へ行く筈であつた。八時半頃に夫は父の家に來て、

皆と一緒になつた。それから私共三人だけ一緒に出かけて市中の景況を見た。麹町から永田町に行き櫻田門を通つて日比谷見附に出て、それから銀座通から眼鏡橋を通つて上野に出た。そこで色々見物ののち、又眼鏡橋に出た。その時餘程疲れてゐたので私は歸らうと云出したら、夫もやはり疲れてゐたので賛成したが、重之助は『こんなよい時に大名行列を見落してはつまらないから銀座へ行かう』と云つてきかない。そこで重之助と別れて小さい天ぷら屋に入つて天ぷらを喰べた。それから運のよい事には折よくその家から大名行列を見ることが出來た。その晩歸つたのは六時半。

四月の半ばから妹おとりの事で心配した〔その事は書いてない〕





明治三十一年八月三十一日二番目の子供が殆ど何の苦痛もなく出生——女であつた。初と名づけた。

出産の時に世話を受けた人々を七夜に招いた。

——母はそれから二日程ゐてくれたが、妹のお幸の胸がひどく痛むので、せん方なく歸られる事になつた。幸に夫が此の頃きまつた休暇を得たので、できるだけの世話をしてくれた——洗濯や何かの事まで。しかし自分のそばに女がゐないので私は時々大へん困つた。……夫の休暇がなくなつてから母は時々夫の留守に來てくれた。二十一日もこんなにして過ぎたが母子共健康であつた。

――娘が生れてから百日になるまで時々呼吸が苦しさうに見えるのでたえず心配した。しかしそれも漸くなくなり段々強くなるやうであつた。

それでも一つ不幸な事があつた。それは不具の事で、初は生れた時から片方の手の拇指が二本あつた。手術を受けに病院へ連れて行く氣には長い間なれなかつた。しかしつい近處の婦人が新宿の大へん上手な外科醫の事を話してくれたのでたうとう行く事にきめた。手術の間、夫が膝に子供をのせてゐた。私は手術を見る事はとてもできなかつた、どうなる事かと思うて、心配と恐しさで胸一杯になつてつぎの室で待つてゐた。しかし濟んでから子供は何事もなかつたやうな顏をしてゐた。暫くして、いつものやうに乳を飲んだ。それで案じたよりも好都合に事が濟んだ。





うちに歸つて前の通り續いて乳を飲んだ。そして小さいからだに何事もなかつたやうに見えた。しかし大へんに幼いからあんな手術などを受けて、何か病氣の種でも作りはしなかつたかと心配した。用心のために三週間程毎日病院に通つた。しかし惡い樣子は少しも見えなかつた。

三十二年三月三日の初節句に父と後藤と兩方から內裏雛、その外御祝の品々、箪笥鏡臺針箱を貰つた。私共もこの時に子供のために茶臺、御膳、その外の小さい物を色々買つてやつた。後藤と重之助はその日見えて、にぎやかであつた。

四月三日穴八幡〔早稻田〕に參詣して子供の息災延命を祈つた。……

四月二十九日初は病氣のやうで私は醫者に診て貰ふことにした。醫者がその朝來てくれる約束をしながら、來てくれない、一日中待つてゐたが駄目であつた。翌日も待つてゐたが來てくれない。夕方になつて初は段々惡くなり、胸のところが大へん苦しさうであつたので、翌朝早く醫者へつれて行かうと決心した。一晩中心配でならなかつたが、朝になつて少しよくなつたらしい。そこでおんぶして獨りで出かけて赤坂の或る醫者へ行つた。診て下さいと賴むと未だ患者を診る時刻でないから待つて居るやうにと云はれた。

待つて居るうちに子供が前より一層ひどく泣出して乳にも吸付かず、ただ歩いて見たり休んで見たりして、すかすより外に仕方がなく、大へん困つた。やうやくの事で醫者が見えて子供を診て貰つたが、その時子供の泣聲が段々弱くなつて、唇が段々蒼くなつた事に氣が付いた。





そこでそれを見て默つて居られないので『如何な樣子でせうか』と尋ねると『晩までもたない』と云はれた。『何かお藥をやつて下さいませんか』と尋ねると『飲めたらよいがね』と云はれた。

私はすぐ歸つて夫や父のうちへ云つてやりたいと思つたが餘りひどく驚いたので——一時に力がなくなつた。幸に或る親切な老婦人が、傘や何かを持つて車に乘る世話をして下さつたので、人力車で歸宅する事ができた。それから人を賴んで夫と父に傳へた。三田の奥さんが世話に來て下さつた。そのお蔭で子供を助けるためにできるだけの事をした。……それでも未だ夫が歸つて來なかつた。しかし心配や世話した事は皆無駄になつた。

それで三十二年五月二日子供は十萬億土の歸らぬ旅へ赴いた。

子供の父と母は未だ生きて居る――よい醫者にかけて診て貰ふ事を怠つてそれで子供を死なしてしまつたやうな父と母とが。さう思へば本當に悲しさにたへない。時々私共はそれを云つて身を責めて居るが歸らぬ事は仕方がない。

しかし子供の死んだ翌日醫者が私共に『あの病氣は初めからどんなに手を盡しても、とても一週間以上生きてはゐなかつたのです。十か十一にもなつてゐたら手術をして或は助つたかも知れないが、今は餘り幼少だから手術などは思ひもよらないことです』と云つた。それから子供は腎臟炎で死んだのだと聞かせてくれた。

こんなにして、私共の持つてゐた望や、これまで色々心配して世話した事や、九ヶ月間段々生長するのを見て喜んだ事は皆一切無駄になつた。



しかし私共二人はこの子供との緣が前世からうすかつたのに相違ないと思ひあきらめて、漸くいくらか悲しみを慰める事ができた。

退屈な時の淋しさに、私は義太夫本の宮城野しのぶの話の風に歌を作つて、心のうちを云つて見た。

これこのうちへ緣づきしは
思ひ廻せば五とせ前
今度まうけし女の子
可愛いものとて育つるかと
我身のなりは打忘れて
育てし事も情ない
かうした事とは露知らず

この初は無事に育つるか
首尾よう成人したならば
やがてむこを取り
楽しませようどうしてと
物見遊山をたしなんで
我兒大事と
夫の事も初の事も
戀しなつかし思ふのを
楽しみくらした效もなく
親子になりしは嬉しいが
先だつ事を見る母の
心を推してたもいのと





——手を取りかはす夫婦の歎き
なげきを立聞くも
貰ひ泣して表口
障子もぬるゝばかりなり

初の死んだ時分は、葬式に關する規則はよくなつて、大久保で火葬する事も許される事になつた。そこで並木に願つて、もし面倒な規則さへなかつたら並木一族の手つぎの御寺へ遺骸をもつて行く事にして貰つた。そこで葬式は門淨寺で行つた。この寺は眞宗本願寺の淺草派である。

——妹の幸は初のなくなつた時、大分ひどい風邪で寢てゐた。しか

し知らせが着いたあとで間もなく來てくれた。それから又二三日して大分よくなつたから、最早心配して下さるなと云ひに來た。

——私は又私で、何處へも行く事がいやになつて丁度一月、家を出なかつた。しかしいつまでも出ないで居る事も、禮儀上できないから、たうとう出かけた。そこで父の家と妹の家へ義理上の訪問をした。

——大分病氣になつたので、母に來て世話をして貰ふつもりの處、お幸も又、病氣になつたのでよし（こゝに初めて出て居る妹）と母と始終ついてゐた。それで父の宅からは世話して貰へなかつた。ただ近處の女の人々が暇のある時、全くの親切から來て世話をしてくれるばかりで、誰も世話してくれるものもない。漸く堀氏に頼んで、世話し





てくれるよいお婆さんを一人雇うて貰つた。この人の介抱でよくなりかけて、八月の初め頃には私も餘程よくなつた。……

九月四日妹お幸は肺病でなくなつた。

——萬一の事があつたら、妹のよしが幸の代りになると始めに約束してあつた。後藤氏も全く獨りで居るのも不自由故、同月十一日に結婚式があり、それから一通りの祝をした。

同月三十日に岡田氏が急になくなつた。

こんな事が重つて色々費用がかかつたので大分困つた。

——幸が死んでよしが餘り早く行つた事を始めて聞いた時、私は大へん氣もちが悪かつた。しかし、私はその心もちを隱して以前の通り後藤にはなしをしてゐた。

十一月に後藤はひとりで札幌に行つた。

明治三十三年二月二日後藤氏は東京にかへり、同月十四日よしを連れて再び北海道に出かけた。

二月二十日午前六時三番目の子供（男兒）出生、母子共に無事。

――女のつもりでゐた處生れたのが男であつた。それで夫が勤めから歸つて來て男子である事を見て大へん驚いて喜んだ。

――しかし子供は十分乳を飲む事ができないので哺乳器で育てねばならなかつた。





生れて七日目に少し髪を剃つてやつた。それから晩に七夜の祝を今度はうちだけでした。

――少し前から夫は風を引いてゐたが、つぎの朝、咳がひどく出て出勤ができなかつたので、終日うちにゐた。

その朝早く子供はいつもの通りに乳を飲んだ。しかし午前十時頃胸がひどく痛むやうで、それから變にうめき出したから醫者を呼びにやつた。折悪しく迎へにやつた醫者は市外に出てゐて晩までは歸られないとの事、それで直ぐに外の醫者を迎へにやる方がよいと考へて迎へにやつた。その醫者は夕方來ると云つた。しかし午後二時頃子供の病氣は急に悪くなつて二月二十七日、三時少し前に子供は僅かこの世に八日ゐてあへなくなつた。……

――今度又こんな不幸があつて、夫に嫌はれるやうになるまででなくとも、こんなに代る代る子供に別れるのは、前世に何か犯した罪の罰に相違ないと獨りで思つた。さう思へば袖のかわく間もなく涙の雨も止まず、私のためにはこの世で空の晴れる事がないやうに思はれた。私のために繰りかへしこんな不幸にあふので、夫の心も悪い方に變るまいかと益々心配になつて來た。私の心にある心配のために、夫の心のうちも思はれて心配した。

それでも夫はただ『天命致し方これなく』と繰りかへしてばかりゐた。

――子供はどこか近い御寺に葬られた方が、參りに行くのによからうと思つたので、大久保泉福寺と云ふ御寺で葬式をし、遺骨はそこへ





納めた。

樂しみもさめてはかなし春の夢

……（日附なし）私が色々心配した故か、子供が死んでから二七日間、顔と手足が少しふくれた。

――しかし餘り大した事でもなく、直ぐに直つた……今ではもう三七日も過ぎた。……

ここで哀れな母の日記が終つて居る。子供の死後二十一日に關する終の記事から最後の數行は、三月十三四日に書かれたものだらうと思はれる。彼女は同月二十八日に死んだ。

日本の生活狀態に充分通じない人は、この簡單な歷史を全く理解することができないだらう。しかしここに書かれた生活の實際の狀態を想像する事は困難ではない。――この夫婦は二間（六疊一間三疊一間）の小さい家に住んで居る。夫は一ヶ月漸く十圓をもうける。妻は裁縫、洗濯、料理（勿論戸外で）をする。大寒の時にも火にあたる事がない。自分は、この夫婦は家賃を入れずに、一日平均二十七八錢でくらしてゐたに相違ないと考へる。娯樂と云つても實は餘程安上りであつた。八錢も出せば芝居見物にも義太夫きゝにも行かれた。それから見物をするのは徒歩であつた。それでもこんな娯樂はこの人々には贅澤であつた。必要な着物を買ふとか、結婚、出產、死亡の時に親戚に贈物をせねばならないとか云ふ場合の費用は、獻身的經濟によつて始めて出





せるのである。實際東京の數千の貧民はこれより一層貧しくくらしてゐる（一ヶ月十圓よりも、もつと少い收入でくらして居る）――しかし、それでもいつも小綺麗に小ざつぱりとして愉快にくらして居る。こんな境遇にあつて子供を生んで育てて行く事は、ただ餘程强壯な婦人にして始めて容易にできる。こんな境遇は田舍のもつと苦しいが、しかし、もつと强壯な農民の境遇よりもはるかに危險である。それで多數のうち弱いものは倒れて死ぬ事は想像する事ができる。

この日記を讀む人々はこんなに愼しみ深くやさしい婦人が、かくの如く不意に、その性質氣分についてはほとんど毫も知らない全くの他人の妻にならうと熱心になつた事を不思議に思ふであらう。實際日本に於ける大多數の結婚はここに書いてある通りの非小說的な方法で、又仲人の

力で整へられるのである。しかしこの人の境遇は例外と云ふべき程氣の毒である。その理由は哀れに簡單である。善良なる女子は皆結婚する事にきまつて居る。或る時期を過ぎて未だ結婚しないのは本人の恥辱であり又人の指彈を受ける。疑もなくこんな擯斥を受くる事がいやさに、この日記の記者は自分の當然の運命を果す眞先の機會を捉へたのであつた。この人はすでに二十九歳であつた。こんな機會は再び出て來なかつたかも知れない。

自分にとつてはこの哀れな奮闘と失敗の懺悔記の眞の意味は、なにも稀有な告白があると云ふ點でなく、ただ日本人には青空や日光のやうにありふれた何物かを示してゐる點にある。柔順なる事と義務を立派に仕遂げることによつて、愛情を得ようとの健氣なこの婦人の決心、どんな僅かの親切に對しても有する感謝の念、小兒のやうな信仰心、





この上もなき無私の念、この世の苦難は皆、前の世に犯した過ちの報いであると云ふ佛教の解釋、絶望の眞中にも歌を作らうとする努力、——凡てこれ等の事は如何にも感動すべき事、如何に感動しても及ばない事である。しかし之は例外のものとは思はれない。ここにあらはれて居る特質は、一例に過ぎない。——下層社會の婦人の德性を代表した一例に過ぎない。恐らくこの婦人と同じく下層社會に生れて、自分の喜びや苦しみを、これ程單純でしかも哀れな日記で表はす事ができるやうな日本婦人は澤山はあるまい。しかし眞面目の信仰の昔昔の時代からこの人と同じく人生は義務であるとの心得をうけつぎ、又この人と同じく無私の愛情を注ぐ力をうけついでゐる婦人は、日本には幾百萬人あるか知れない。

# 文學に關する讀書について

書籍や典據を離れて文學的生活及び著作に關する連續的の講義をして、できるだけ違つた國々に於ける文學の製作者の間の、實際上の經驗の結果を示す事に關する、私の約束を果したい。題は讀書である——見たところ或は甚だ簡單な題目だが、實はそれ程簡單でない、諸君の考へられるよりも、もつと遙かに重大である。私は讀書を心得て居る人は極めて僅少であると云つてこの講義を始める。趣味と判斷が得られるまでには、文學に關する澤山の經驗が必要である、そしてそれがなければ、讀書法を會得する事は殆ど不可能である。私は殆ど不可能と云ふ、その理由は、元來生得の趣味を以て、遺傳の文學的本能によつて、二十五歳にも達しないうちに非常によく讀む事のできる珍しい人が時にあるからである。しかしこれは例外である、それで私は普通の人に話す。

書物の文字、文句を讀む事は本當の意味の讀書にはならない。機械的に言葉や文字を讀ん

でゐて、甚しきは全く正しく音讀しながら、心は全く違つた題目に奪はれて居る事のあるのに諸君はよく氣がつくであらう。この單に機械的な讀書は、若い時に全く無意識的になる、そして注意力と無關係に行はれ得る。それから自分の興味のために、言換へれば『話のため』にのみ本を讀む事、卽ち書物からその話の部分だけを引拔く事を讀書と云ふ事はできない。しかし世界でなされる讀書の大部分は正しくこんな風に行はれるのである。幾千また幾千と云ふ書物は毎年、毎月、いや毎日ともなはれよう、少しも讀書しない人々に買はれる。その人々はただ讀んだつもりで居る。彼等は面白いために、彼等の所謂『時間つぶし』に書物を買ふ、一二時間のうちに、彼等の眼はページをすつと通つて、彼等の頭に、見てゐる事に關する一二のぼんやりした考が殘る。これを彼等は讀書と信じてゐる。『君は何々の書物を讀んだ事があるか』と問はれる事や『私は何々の書物を讀んだ事がある』と云ふ事程ありふれた事はない。しかし是等の人々は眞面目に云つて居るのではない。『私はこれを讀んだ』或は『私はあれを讀んだ』と云ふ千人のうちで、その讀んだ物について、聽くだけの直打のある說を吐く事のできる人は恐らく一人もあるまい。度々私は學生が或る書物を讀んだといふのを聞く、しかし若し私がその書物について何か質問をしたら彼等は何の答もできない、或





は精々の處で、彼等が讀んだつもりで居る物について誰か外の人が云つた事をくりかへすだけである事を見出す。しかしこれは學生にのみ限つたわけではない、凡ての國に於て大多數の人々が書物を丸呑みにする方法である。それでこの講義の總論的部分を結ぶがために、私は大批評家と普通の人との區別は主に、大批評家は讀書法を知つて、普通の人は知らないと云ふ事を云ひたい。或る書籍の內容に關して創造的意見を發表する事のできない人は、實は書物を讀む事のできない人である。

疑もなく諸君はこれは讀書と研究を混合して居ると考へるだらう。『私共が歷史や哲學や科學を讀む場合には、それこそ甚だ丁寧に、本文の意味なり關係なりを充分に研究して徐ろに、考へながら讀む。これは勉強です。しかし教室の時間以外に小說や詩を讀む場合は、それは娛樂のために讀むのです。娛樂と研究は全く違つた物です』と諸君は言ふだらう。諸君は皆かう考へるかどうか知らないが、青年は大概そんな風に考へる。事實は、讀む價値のある書物なら、丁度科學の書物が讀まれると同じ方法で——單に娛樂のためでなく——讀まるべきものである。それから讀む價値のある書物は、悉く科學の書物にあると同じ分量の價値があるわけである。ただその價値は全然違つた種類の物かも知れないが。そのわけは、要す

るに、小說傳記詩歌のよい書物は科學的著述である。それはいくつかの科學の最高の原理、殊に人間の性質の知識と云ふ、人生の大きな科學の原理に隨つて作られた物であるから。

外國の書籍に關しては、これは殊に本當である。しかし私共自身の國語でないもので讀む場合には、與へられた助言に隨ふ事は一層困難であらう。しかし、どれ程の英人は英語のよい書物を實際讀むと諸君は想像するだらうか。多分讀んで居るつもりの二千人のうち一人より多くはなからう。さらに、今日ロンドンで毎日六千冊以上の書物が出版されるが、今日程一般公衆がぞんざいな讀方をした事はなかつた。書物は一種の流行のやうに——むしろ或る流行に隨つて書かれる、賣られる、讀まれる。外の物にも流行がある通り、文學にも流行がある。それで公衆が特種の娯樂を要求すると、その要求に應ずるために特種の書物が與へられる。この公衆には眞の文學にある藝術も優美も、大傑作にあるべき大思想も全く無用になつたので、學者は本當の文學を作り出す事は殆どなくなつた。文體も美もない書物、ただ面白い話を書いて大きな金儲けができる、同時に、實際よい書物を製作するのに、三年五年十年もかかつてゐては或は餓死すると云ふ事が分つて居る以上、彼の天職の高い方の義務に不忠實になるのは止むを得ないだらう。金錢





の事に關して幸福な地位に置かれて居る人々は、時々何か偉大な物を或は企てる事もできよう、しかし耳を傾けてくれる人は誰もないかも知れない。最近數年の間に趣味は非常に墮落したので、私が以前に云つたやうに、文體は事實消滅した——そして文體は思考（スイシャング）である。そして英國に於けるこの事情は悪い習慣の讀書——讀書法を知らない事から主に起る。

學者が心にかけて置くべき事の第一は、書物は單に娯樂として讀むべき物でないと云ふ事である。餘り教育のない人は娯樂のために讀書しても、それに對して非難さるべきでない、その人々は實際の大文學にある深い方の性質を評價する事はできない。しかし大學教育を受けた青年は、單に娯樂のために讀書しないやうに、早くから自分で訓練しなければならない。一たびその訓練の習慣ができると、單に娯樂のために讀書する事ができなくなつて來る。さうなると、智力の糧（かて）を得る事のできない書物、高尚な情緒とその人の智力に何等訴へる事のない書物は、たまりかねて投出すであらう。これに反して、娯樂のために讀書する習慣は、數千の人々にとつて酒を飲む事、阿片を吸ふ事の習慣と全く同じ種類の習慣になる、それは一種の催眠劑、時間を空費させる物、永久の夢の狀態を續けさせる物、結局思想の能力を凡て破壞して、心の表面の部分をのみ活動させて、感情の深い泉や知覺の高尚な能力を使用せ

ずに置くと云ふ結果になるやうな物である。

私共は單にこの種類の讀書について如何なる事實があるかを述べて見よう。例へば一人の事務家が毎日事務所へ通勤の往復の途中、時間潰しに本を讀む、何を讀むのであらう。勿論、小說、非常に樂な讀物だから暫く彼の苦痛を忘れさせる、毎日のおきまりの小さい色々の苦勞に對して彼の心を鈍くさせる。一兩日でその小說を讀み了る、それから別のを取る。この節は讀む事は早い。一年經つたら、彼は百五十冊から二百冊までの小說を讀んでゐた、どんなに貧しくてもこの贅澤は彼にはできる、巡回文庫の制度があるから。數年の後には彼は何千と云ふ小說を讀んだ事になる。彼はその小說を好むのであらうか。否、彼は諸君に、そのしこの種類の讀書を續けないと甚だつまらなくなると云ふであらう。その結果は能力をしびれさせる事にしかならない。彼はその數千冊のうち二三十冊の名も覺えてゐない、まして內容など覺えてゐるわけはない。この讀書の結果はただ精神が朦朧となる事をしか意味しない。それが直接の結果である。間接の結果は精神の發達が妨げられる事である。凡ての發達は當然多少の苦痛を意味する、そして私が云ふやうな讀書は無意識にその苦痛を避ける手段とし





て使用される、それでその結果は萎縮である。

勿論これは極端な例である。しかし娯樂のために讀書をして、それが習慣となつて、その習慣に耽る方法が手近にあると云ふ場合は、これは究極の結果である。現在日本にはこんな種類の危險は殆どない、しかし倫理上の警告として私はこんな例證をあげる。

これはよい文學の種類にも避くべき物があると云ふ意味ではない。よい小說は最大の哲學者でも實際讀みたいと思ふ程によい讀物である。要するに讀まれる物の性質よりもさらに、讀方が大事である。よくこれまで云はれたやうに、どんな書物でも何かよいところがそのうちにあると云ふのは極端かも知れない、ただかう云ふ方がもつとよからう、卽ち、書物からよい影響を受けるのは、その著者がどんなにえらくとも、著者の藝術によるよりは、讀者の習慣による方遙かに多い。

以前の講義に於て、私は子供の觀察法は大人の觀察法よりもすぐれて居る事に、諸君の注意を促さうとした、同じ事實が子供の讀書法についても注意される。たしかに子供はただ極めて簡單な物をしか讀めない、しかし子供は極めて完全に讀む、それから讀む物について倦くことをなく、くりかへしくりかへし考へる、一つの小さいお伽噺は、讀んでから一月の間

も彼の心を占有する。彼の小さい想像の氣力は恐くその物語の上に消費される、それでもし賢明な兩親なら、第一の物語の面白さ、及びその想像上の結果が消え始めないうちは第二の物語を讀む事は許さない。それから後の習慣、私が敢て惡いと云ふ習慣はすぐに子供の本當に注意深い讀書力を破壞してしまふ。今度は職業的讀者、科學的讀者の場合を考へて見よう。そこで私共は同じ力が、勿論非常に發達して居る事に氣がつくであらう。私がいつも訪問した大きな出版書肆では、每年一萬六千の原稿が集つて來た。この原稿は皆一通り見て判斷を下さねばならない、ところでそんな仕事をする人は所謂職業的讀者（プロフェッショナル）である。この職者的讀者は學者で、又異常の才能の人でなければならない。一千の原稿のうち、恐らく彼は一つ以上は讀まないだらう、二千のうち事によれば三つ讀むだらう。その外は彼はただ數秒だけしか見ない——その原稿は讀む價値があるかどうかを定めるのは一瞥で足りる。ただ一節の文章の形からも、文學上の見地からそれが分る。名前だけでも、澤山の場合には、內容を判斷するのに充分である。或る原稿は彼の注意を一分或は五分惹く、極めて少數のものだけ、もつと長く考慮される。一萬六千のうち、十六だけが最後の判斷を受けるために選ばれる。それだけは初から終まで讀む。讀んでから八つだけは更に考へる事にきめる。その八つを再び、





もつとずつと丁寧に讀む。第二回の試驗の終にその數は多分七つになる。この七つは第三回目の檢査を受ける事になる、しかしこの專門家はよく物が分つて居るから直ちに讀むやうな事をしない。彼は引出の中に入れて鍵をかけて置く、そして全一週間見ないで置く。その週の終にその七つの原稿とその性質をそれぞれはつきり想ひ出せるかどうかを見ようとする。極めてはつきり三つは想ひ出せる、あとの四つはすぐには想ひ出せない。もう少し努力してもう二つは想ひ出せるが、二つは全く忘れてしまつた。これは一大缺點である、二回も讀んで何等の印象を殘さないやうな著述は、本當の價値がない。彼はそこで引出から原稿を取出して、二つ——想ひ出せない二つを浚書とする、それからあとの五つを再讀する。三度目に一切判定される——題、仕上げ、想、文學上の品位など。三つは第一流ときまる、二つはたゞ第二流として書肆で受取られる。それでこの事が終る。

こんな事が凡て大出版書肆で行はれる、しかし不幸にして悉くの文學上の著作はこれと同じ嚴重な方法では判斷されない。今日はむしろ公衆の好みで判ぜられるが、公衆は最上の物を好まない。しかしケムブリッヂ大學やオックスフォード大學の出版部のやうなところでは、原稿の檢定は實際非常に嚴しいのである、再びどこでもこれ程までには讀まれないと思ふ程、

充分によく讀まれるのである。さてこの專門の讀書家はそんなに知識や學問や經驗はありながら、子供がお伽噺を讀むと餘程同じやうにして書物を讀むのである。彼はその精神の全力を注いで、書物のうちにある一切の物を、その凡ての關係から、その無數の方面から詳細綿密に考へる事は子供の頭腦が考へる事と同じである。子供は悪い讀者であるとは僞りである。悪い讀書の習慣はずつと後になつてできるので、不自然である。自然の、そして又學者風の讀書法は子供の方法である、しかしそれには私共が年と共に失ひ易い物、卽ち忍耐と云ふ貴い天賦の物が要る、そしてこの忍耐がなければ、何事も、讀書でも、よくはできない。

それで注意深い讀書法は大事であるから、それを濫用してはならない事を諸君は容易にさとる事ができる。よく訓練された高い教育を受けた精神の力は普通の書物の上に浪費されてはならない。普通と云ふのは安つぽいつまらない文學の事である。自己修養に取つて書籍の適當な選擇程大事な事はなく、又それ程輕んぜられて居る事もない。有能の人は何を讀むべきかを『見つける』のに時を空費する事も正しくない。その人は造作なくあらゆる方面の文學のうちの最良の物の範圍を正しく知つてゐて、その最良の物を尊重する事ができる。勿論特殊の研究家、批評家、專門の讀者になるためには、よい物も悪い物も皆讀まねばならない、





そして經驗でできた非常に速い判斷力を働かせて、多くの苦痛を逃れる事ができる。例へば、セインツベリ教授のやうな批評家によつてなされたに相違ない、そして充分になされたに相違ない讀書を想像して見るがよい。彼の大學教育、それから、先づ中々の讀書を要するギリシヤ、ラテンの古典に通達した點を離して見ても、凡ての世紀の英語で五千冊位は讀んだに相違ない——それだけの書物にある一切の物、それぞれの歷史、それからできるだけのその著者の歷史を充分に學んだに相違ない。彼はこの文學と云ふ大きな一團に關する社會上及び政治上の歷史を充分に學んだに相違ない。それでもこれは彼の仕事の半分にも足りない。二つの文學の權威であるので、彼のフランス語の研究、新舊フランス語の研究は、英語の研究よりもさらに一層博かつたに相違ない。凡てこれ等に關する著作の研究は熟練なる讀書によつる外はなかつた、全體に於て始から終まで娛樂らしい處は少しもない。ただ娛樂らしい處は結果にあるだけ、しかしその結果は非常に大きい。何がこの世でむづかしいと云つても書物を讀んでそれからその書物の文學的價値を丁度數行で明瞭に、そして正しく云ふ事程むづかしい事はない。これができる人は全世界に二十人以上はゐない、それには絶大なる經驗と才能を要するからである。普通の人で、一生學問勉強しても、三流四流の批評家になれる見込

のある人も中々ない。しかし私共は讀書法を學ぶ事はできる、それが決して小さい事ではない。大批評家は彼等の判斷によつて、これをなす方法を私共に敎へる事ができる。

しかし要するに、最大の批評家は公衆である——一日や一代の公衆でなく、數百年の公衆、時と云ふ恐るべき試驗で、試された書物に關する國民的意見及び人類の意見の合同一致である。評判は批評家によつて作られるのでなく、數百年の間の人間の意見が集合して作られる。それから人間の意見は、學問のある批評家の意見のやうに判然ときまるのではない、私共はその性質を適切に說明する事のできない何か大きな情緒のやうにぼんやりして居る、それは思考でなくて感情である、ただ『それが好き』と云ふだけである。それでもこの種類の判斷程たしかな判斷はない、卽ちそれは絕大の經驗の結果であるからである。よい書物の試驗は數代の間に渡つて働く人類の意見によつて行はれる物である。そしてこれは甚だ簡單である。

偉大なる書籍の試驗は、私共がそれをただ一度か或はそれ以上くりかへして讀みたいかどうかによつてきまる。

實際眞に偉大なる書物なら、私共は始めてそれを讀まうと思つた時よりも、さらに一層二度目にそれを讀む事を欲するのである、そして私共がそれを讀む度毎に、その中に新しい意





味と美を見出すのである。敎育のあるよい趣味の人が、一度以上は讀みたくないと云ふ書物は大概捨り價値はない。以前あの偉大なる小說家ゾラの技倆について甚だ巧妙な議論が行はれた、或る人はゾラは大天才を有して居ると主張し、或る人はゾラはただ著しい種類の才能を有して居るだけだと主張した。その激しい議論で大分突飛な意見も出て來た。しかし突然甚だ偉大な批評家が單にこんな問題を出した、『ゾラの書物のどれかを二度讀んだ人、或は二度讀みたいと思ふ人はあるか』誰も返事をする者はなかつた、それでこの問題は解決した。多分ゾラの書物を二度讀まうと思ふ者はない、そこでこれが卽ちそのうちに偉大なる天才はないと云ふ充分な證據である。十萬の讀者に買はれても、決して二度讀まれない書物はどんな書物でも、淺薄か虛僞である。しかし私共はただ一人の判斷を誤のない物と考へる事はできない。一冊の書物を偉大であると認むる意見は多數の人の意見でなければならない。卽ちたとへ大批評家でも、分らない事鈍感な事がどうかすると有勝である。たとへばカーライルはブラウニングを好まなかつた、バイロンは英國の大詩人のうちで幾人かを嫌つた。多くの書物に對して信ずるに足る批評をする人は、多方面でなければならない。私共は時々ただ一人の批評家の判斷なら疑ふ事があるかも知れない。

しかし數代に渡つた人々の判斷を疑ふ事はできない。たとへ私共は數百年間感嘆賞讃された書物のうちに、何等よいところを認める事ができないでも、それを丁寧に調査研究して見ると、最後にこの感嘆と讃賞の理由をさとる事ができるやうにならう。貧しい人に取つてあらゆる書庫のうちの最上の物は、こんな大著述即ち時の試驗に合格した書物で全部成立して居る書庫であらう。

それで讀書の選擇に關して、私共に取つて最も大事な案内はかうであらう。私共は二度以上讀まうと思ふ書物だけを讀むべきである、それから何か特別に投資する理由でもなければ、それ以外の書物を買うてはならない。第二に注意を要する事は、凡てこんな偉大なる書物のうちに潜んで居る價値の一般の性質である。これ等の書物は決して古くならない、永久に若い。偉大なる書物は若い人によつて、一讀だけでは理解されさうにはない、理解されてもまだ外面だけに過ぎない。多くの場合に於て、そんな書物のうちにある物を發見するために人類が數百年を要した事を思はねばならない。しかし人が人生の經驗を積むに隨つて、その書物は新しい意味を生ずる。十八で面白かつた書物はもしよい書物なら、二十五では一層面白からう、そして三十になつたら新しい書物のやうな興味を感じよう。四十になつて讀み直し





て、何故この美しさが前に分らなかつたらうと不思議に思ふだらう。五十六十になつても同じ事がくりかへされよう。偉大なる書物は讀者の頭の生長の割合に應じて生長する。シェーキスピヤやダンテやゲーテの著作を偉大にしたのは、これまでの數代の人々によつて、この異常な事實が發見されたからである。恐らくゲーテがこの場合一番よい例にならう。ゲーテは散文の小話をいくつか書いた、それは子供に取つてお伽噺の面白さがあつたので子供は好んだ。しかしゲーテはお伽噺のつもりではゐなかつた、經驗のある人々に對して書いたのであつた。青年はそのうちに眞面目な物を發見する、老人はそのうちに全世界の哲學、人生の凡ての智慧を發見する。鈍い人なら餘り發見するところはなからう、しかし人生に關するその人の知識の割合に應じて、それ等の話を考へ出した頭の偉大なる事を發見するであらう。

かう云つても、それはこれ等の書物の著者が自分でその著書の中に入れた事の全體の廣さと深さを豫想してゐたと云ふ意味ではない。大藝術はそれが偉大である事を少しも知らないで無意識にできる、それで作者の天才が大きければ大きい程、自分に天才があると云ふ事を知る機會は益々少い、それで、本人が死んでから餘程にならないでは公衆に發見されさうにはない。文學に於てなされた大事業は普通は自分で偉大と考へて居る人々によつてなされて

ゐない。數千年前アラビヤの或る一漂泊者が夜の星を眺めて、世界を造つた見えない力と人間との關係について考へて、心を悉く一種の詩で吐いたのが今日私共に殘つて居る『ヨブ記』である。ヨブに取つては蒼空は形のある丸天井であつた、その向うに何があるか、それはヨブは夢にも考へなかつた。ヨブの時代より私共の天文學の知識はどれ程大きく發達したらう。私共は私共の天文學の機械で見えるところでは今三千萬の太陽があつて多分それぞれ行星を伴うて居るだらうから、多分總數三億の世界のあることを知つて居る。多分このうちの多數には聰明な生物も住んで居るだらう、數年のうちには火星に私共の文明よりももつと古い文明のある事の確證が得られよう。宇宙に關する私共の概念とヨブの概念との間には、どんなに大きい相違があらう。しかしその實直なアラビヤ人かユダヤ人の詩は、この相違があるからと云つてその美しさと貴さの一小部分をも失つてゐない。全く反對である。新しい天文學の發見と共に、ヨブの言葉は——彼は眞に大詩人であつて、數千年前、彼の心にある眞のみを語つたから——私共に取つて一層偉大な意味をなすのである。又餘程昔、ギリシヤの或る小說家が『ダフニスとクロヰ』と云ふ田舍の少年少女について小さい話を書いた。それはこの上もなく簡素な言葉で、その少年少女が何故か分らずに愛し合つた事、お互に云つた無邪氣



な事、それから大人達がやさしく彼等の事を笑つて、それから人生の最も簡單な法則を教へた事を物語つてある小さい話である。つまらない題目と思ふ人もあらう。しかしその話は世界のどの國語にも飜譯されて、今もなほ私共に取つて新しい話のやうに讀まれる、そして私共がそれを讀み直す毎に、それが一層美しく思はれる、それは無邪氣と少年の感情に關する本當のやさしい事をいくつか教へるからである。それにある少年少女と同じく、その小說は決して老ゆる事はない。或はずつと後になつて、三百年程前にフランスの或る僧が或る學生の話を書かうと思ひついた、その學生は或る浮氣女に迷はされ、その女のために恥辱と苦痛のいくつかの場面へ引出された。『マノン・レスコー』と云ふこの小さい書物は私共のために昔の時代、人は劍を帶びて髮に紛をふりかけてゐた時代、一切の物は今日の世の中と思ひ切つて違つて居る時代を表はして居る。しかし話は文明のどの時代にもつて行つても、私共の時代にもつて來ると同じやうに眞である。その話にある苦痛と悲哀は丁度私共自身の物のやうに私共を感動させる、それから、心からの惡者ではなく、ただ弱くて我儘なその女も、その悲劇の結末まで丁度その女の犧牲となつた青年を魅したやうに讀者を魅するのである。ここに又世界の不朽の偉大な書物の一つがある。或は、百程のうちからもう一つ例を引いて、

ハンス・アンデルゼンの話を考へて見よう。アンデルゼンは道徳上の眞理や社會哲學は、他のどの方法によるよりも、小さいお伽噺や子供の話で教へる方がよいと云ふ考を抱いた、それで數百の古風な話を藉りて、アンデルゼンは新しい幾組かの不思議な話を作つたが、それがどこの文庫圖書館にもなくてはならぬ物となつて、どこの國々でも子供よりもかへつて大人に讀まれて居る。この驚くべき話の集りのうちに、人魚の話がある、それは諸君は皆讀んだ事があると私は思ふ。勿論人魚と云ふやうな物はない、見方によつてはこの話は全く不合理である。しかしその話の表はす無私と愛と眞實の情緒は不朽である、そしてそんなに美しいので、私共はその外形のうそらしい事は全く忘れて、ただその寓話のうしろにある永久の眞理をのみ見るのである。

今諸君は偉大なる書物と云ふ意味を正しく理解したであらう。書物の選擇についてはどうであらう。數年前サー・チョン・ラボックと云ふ科學者が世界最良の書物と彼が云つた物——或は、少くとも最良の書物百種の目錄を書いた事を諸君は覺えて居るだらう。サー・チョンの例にならつて、外の文學者も亦自分等が最良と考へた物の目錄を銘々作つた、それでこんな經驗の價値を私共に示すべき時が充分經過した。出版書肆に對する外には、これは全く





價値のない物ときまつた。その百部の書物を買ふ人は多いだらうが、讀む人は極めて少數である。これはサー・チョン・ラボックの考が悪いわけではない、多數の色々違つてできて居る頭腦に對して、讀書の一定した針路を定める事は誰にもできないからである。サー・チョンは自分に最も氣に入つた物について自分の意見を發表しただけである、外の人なら違つた目錄を作つたであらう、多分二人の學者で全く同じ目錄を作る事はできなかつたらう。偉大なる書籍の選擇は、如何なる事情があつても、銘々個人的でなければならない。つまり諸君は諸君のうちにある光明によつて、銘々に選ばねばならない。文學の色々違つた種類に最良の注意を進んで與へられるやうな、それ程多方面な人は極めて少い。平均して人は一種類の小題目——自分の天賦の才能嗜好に最も一致する題目、自分の氣に入つた題目に自分を制限して置く方がよい。そして何人も私共の個人的性格氣質を充分に知らないで、又それに同情しないで、どこに私共の能力があるかを私共のためにきめる事はできない。しかし一つの事はできる——卽ち、第一に、文學のどんな題目が諸君にこれまで興味を與へて來たかをきめる事、第二に、その問題について書かれた最良の物は何であるかをきめて　それからそれと同じ問題に關係あるやうでも、實は未だ大批評家もしくは大輿論の賞讃を得てゐないやうな、

はかないつまらぬ書物は除外して、その最良の物だけを研究する事である。

そんな兩方の賞讃を得た書物は諸君の想像する程澤山はない。銘々の大文明はギリシヤ人の文明だけを除いて第一流の書物は二三冊づつしか出してゐない。凡て大きな宗教の教を含んで居る聖い書籍は文學としても當然第一流である、その理由は、それが書かれた國語で、できるだけ最上の文學的完全に達するまで幾度となくみがかれて來たからである。民族の理想を表はす偉大なる叙事詩も亦第一流に置く價値がある。第三に人生を反映せる戯曲の傑作も最上の文學に屬する物と考へられねばならない。しかしどれ程の書物がこのやうに代表されるであらう。澤山はない。最もよい物はダイヤモンドのやうに大量には決して發見されないい。

私はこの通り敢て云うて見た一般的注意の外に、二三の精選した書物——學生がそのよい版を買うて一生讀んでよい書物に關して少し云つてもよからう。澤山はない。歐洲の學生に取つてギリシヤの作者の多くを擧げる事が必要であらう。しかし古語の研究をしたいては、こんな作者はこの國の學生にそれ程必要はなからう、その上ギリシヤ生活とギリシヤ文明の著しき知識はそれ等の正しい理解を起さしむるに必要である。かう云ふ知識は、彫刻、繪畫





貨幣、彫像によつて——存在した物を、想像力によつて見られるやうにする藝術品によつて最もよく得られるのであるが、今のところ、古典研究の美術方面は繪畫その他の材料がないので日本では殆ど不可能である。それで私はこの範圍に屬する傑作については殆ど云はない。ただ歐洲文學の全體の基礎は古典研究にあるから、學生はギリシヤ神話、及びギリシヤ文學及び戯曲の最上の物を鼓吹した傳說の概要を充分に理解する事をたしかに努めねばならない。諸君は文學の高い階級に屬する英書を開いてギリシヤ信仰、ギリシヤ物語、或はギリシヤ戯曲に關係のない物は殆どない事を見るであらう。神話は諸君に殆ど必要である、しかしその題目の範圍が餘りに廣いので、大概の人はそれを充分に研究しようとする氣がなくなる。しかし充分の研究は必要でない。必要なのはただ概要である、そして諸君にはつきりした面白い書方で、その概要を與へる事のできるよい書物は非常に役に立つ。フランス語やドイツ語にそんな書物は澤山ある、英語では私はただ一册、ボーン文庫にあるカイトレイの『古代ギリシヤ伊太利の神話』を知つて居る、それは哲學的精神で教へると云ふ珍しい長所をもつて居る。名高いギリシヤの書籍について云へば、諸君にとつてそれらの大概の價値は餘りないに相違ない、適當な飜譯の數が少いからである。私は先づ韻文譯は凡て無用であると云ひた

い。ギリシヤ語の韻文譯ではギリシヤの詩を譯譯する事はできない――テニスンの譯譯したホーマーが二三十行程ある。それから同じ程有能の人が譯譯した他のギリシヤ詩人の數行がある、それ等は皆宜しい。しかしギリシヤ或はラテンの作者を研究したければどうしても散文譯を取る方がよい。勿論私共は第一にホーマーを考へねばならない。英語に二つの散文譯がある、一つは『イリアッド』ので一つは『オディッセー』のである。この二つの大叙事詩のうちで、あとの方が殊に大事である。それに關する引照は文學の凡ての部門に無數にある、そしてこの引照はいつもその題の詩に關係がある、卽ち『オディッセー』は『イリアッド』よりももつと傳奇的であるからである。ランングとブッチヤーの散文譯の長所は、散文ではあるが、ギリシヤの詩の流暢な句調と音樂を幾分保存して居る點にある。その書物は諸君が絕えず持つて居る價値はたしかにあると私は思ふ、その効用は後になつて現れて來るであらう。ギリシヤの大悲劇は悉く譯譯になつて居るが、これ等の譯譯を私は甚だ熱心には勸めたくない。大概の場合に外の方面から、その戯曲の話を知る方がよからう、そしてそんな物は數百ある。諸君は少くともソフオクリーズ、エスキラス、それから殊にユウリピディスの大戯曲の題目を知らねばならない。ギリシヤの戯曲は、正しく理解するには餘程の研究を必要とす





るやうな方法で組立ててある。諸君は考古學者のやうにこれ等の事を理解する事は必要ではない、しかしこれ等の戯曲の話の幾分を知つて居る事は必要である。喜劇に關しては、アリストフアニースの著作はその價値と興味に於て全く無類である。説明を要する處はない、數千年前アゼンス人を笑はせたと同じやうに今日私共を笑はせる、それでその著作は不朽の文學である。抒情詩人のうちでは、近世の物だが英語の古典となりさうな譯譯が一つある、それはセオクリタスのラングの譯譯で小さい本だが、その種類のうちで甚だ貴い物である。諸君は私が極めて少數だけを云つて居る事が分るだらう、しかしこれ等少數の物は、もし諸君が適當に使用すれば、諸君に取つて大きな意味になるだらう。後のギリシヤの作、古い文明の衰頽期にできた作のうちで、世界の人が決して飽く事のない一傑作がある――それは前に云つた『ダフニスとクロヰ』の物語である。これはどこの國語にも譯されて居るが、殘念ながら最良の譯譯は英語でなく、フランス語――アミヨーの譯譯である。しかし澤山英語の譯譯はある。これは諸君は必ず讀まねばならない。ラテンの作者については、ここに澤山云ふ必要はない。ヴアーヂルとホレイスの甚だ良い散文譯はあるが、これ等の作の價値は、ラテン語の知識がなければ諸君に取つて大した物ではない。しかしながら『エニード』の話は知る必

要がある、それでこれはコニングトンの譯で讀んだ方が最もよからう。諸君の一般教育の進行中、主なるラテンの作者や思想家に關して幾分知らないわけには行かない、しかし諸君が餘り名を見た事のない一つの不朽の作がある、そしてそれは誰でも讀むべき書物である——それはアピユレイウスの『黄金の驢馬』の事である。よい英語の譯がある。それはただ魔術の本であるが、最も不思議な物語で、一時の文學でなく世界の文學に屬する物である。

しかしギリシヤの神話は、美はしい點に於て永久に不滅であるが、私共の言語の形、曜日の名までにすつと反響を殘した古い英國の宗教、北歐民族の宗教よりも、もつと密接に英文學に關係があるとは云はれない。英文學の學生は北歐神話について幾分知るべきである。それにはやはり美はしいところ、別の變つた種類の美はしさが澤山ある。そしてそれはこれまで存在せる最も高尚なる戰士の信仰の一つ、力と勇氣の宗教を表はして居る。諸君は今圖書館に北歐詩歌の完全なる集をもつて居る、それは二卷の『コルプス・ポエテイクム・ボレアリ』「北歐詩集」の事である。不幸にして諸君は未だ『サガ』や『エツダ』のよい叢書をもたない。しかしギリシヤ神話のもつと大きな題の場合に於ける如く、英語に小さい書物があつて、北歐民族の宗教と文學の兩方に關する大事な事——卽ち諸君に取つて必要な事——の概要を悉く書いた物がある、それはマレツトの『北歐の古事』である。サー・ウオルター・スコツトはこの小さい書物に、色々の飜譯の最も價値ある部分を寄稿して居る、それでこれ等の飜譯は時の試驗に著しくよく堪へて來た。ビショップ・パーシーの序論は古めかしいが、しかしそのためにこの書物の生々した價値を少しも下げる事はない。私は悉くの學生が心がけて持つべき書物の一つと考へる。

外國語から英語に飜譯された近代の大傑作に關しては、私はできるだけ原語で讀む方がよいとしか云へない。ドイツ語でゲーテの『フアウスト』を讀む事ができたら、英語で讀んではならない、ハイネをドイツ語で讀めるなら、ハイネが監修したフランス語の散文譯も、英語の韻文譯（それは澤山ある）も諸君には無用である。しかしもしドイツ語がむづかし過ぎるやうなら、ヘイワードの散文譯でブツハイムの校閲した『フアウスト』を讀む方がよい。それは圖書館にあつて、現在ある種類のうちで最良の物である。『フアウスト』は人が買うて座右に置いて、一生の間度々讀むべき書物である。ハイネについて云へば、彼は世界的詩人である、しかし飜譯では著しく見劣りがする、それで私はフランスの散文譯だけを勸める、ブラウニングとラゼイラスの他の英語譯は少し力が弱い。數年前にハイネのすぐれた飜譯が

連續して『ブラックウッド雜誌』に現れたが、私の信ずる處では、未だ書物にはなつてゐない。

ダンテについて云へば、私は伊太利語以外の國語に於ても、諸君に強く訴ふる事ができるかどうかを知らない、それからダンテの偉大な事を理解するためには中世紀を充分に理解せねばならない。私は外の伊太利の偉大なる詩人達について同じ事を云ふ事ができる。フランスの戯曲家のうち、諸君はモリエールを研究せねばならない、モリエールは重要な點ではシエーキスピヤにつぐだけである。しかしモリエールは飜譯で讀んではならない。ここで私はフランス語を讀めない人はモリエールはそのままにして置く方がよいと斷然云ふ、英語では纖細な機智や諷刺は譯出する事はできない。

近世の英文學について云へば、私は私の講義中に、世界文學のうちに位置を取る程の價値のある少數の書籍をあげる事を心がけて來た、それでそれをここにくりかへす必要はない。しかし、少しふりかへつて、私は再び諸君にマロリーの書『アーサーの死』の非常な價値を思ひ出して貰ひたい、そしてそれは諸君は買うて側に置いて屢々讀むべき極めて少數のうちの一つである事を云ひたい。西洋武士道の精神は全部その書物のうちにある、そして私はそ





の武士道の精神と凡て近代の英文學との關係の如何に深いかは諸君に語る必要は殆どない。言語の或る特別の研究をする考でなければミルトンを讀む事を勸めない、ミルトンの語學的價値はギリシヤとラテン文學に基づいて居る。ミルトンの抒情詩に關しては――それは別問題である。それは研究すべきである。暗示的に云ふ事の外、もう云ふ事がないから、私は諸君は悉く、シエーキスピアのよい版の一部をもつて毎年一度讀む方がよいと思ふ、最初は文句はすつかり分つても分らなくても頓着せずに讀む方がよい、それはあとで分つて來るから。諸君がもしこの助言に隨へば、シエーキスピヤは諸君が讀む度毎に、大きくなつて、そして最後に諸君の考へ方と感じ方に甚だ強い、甚だ健全な影響を與へるやうになる事を私は信ずる。シエーキスピヤを讀むには大學者になる必要はない。それからシエーキスピヤを讀む事について本當である事は、凡ての世界の大傑作について、程度は小さいが、同じく本當である。ゲーテの『フアウスト』についても本當である。ホーマーの詩の最もよい章についても同じく本當である事が分る。モリエールの最上の脚本についても本當である。ダンテについても昨年講義をした英語のバイブル中のあの篇についても本當である。それだから、若い讀者に與へられた古いが、しかし甚だすぐれた助言を一つくりかへしてこの講義を終るのが一

番よいと私は思ふ。『誰でも新しい書物が出版されたと聞いたら、古い書物を讀め』

小泉八雲鈔終

本書は小泉八雲全集より抄出せるものにして、出版にあたり、第一書房の厚意ある承認を得たものである。



昭和十二年九月十一日印刷
昭和十二年九月十五日發行

青年讀物第二篇

小泉八雲鈔

（非賣品）

編輯兼發行人　長野縣上伊那郡伊那町大字伊那三七番地　上伊那郡教育會　代表者　伊藤泰輔

印刷者　長野市妻科町一七三番地　大日方利雄

印刷所　長野市南縣町六五七番地　信濃毎日新聞株式會社

終